

# 豫告

風俗書報  
臨時增刊

## 奠都三十年祭

四月二十五日發行

爰に奠都三十年の一大紀念期に遭遇す謹而惟るに  
今上皇帝天資英明にましく夙に 大統を繼紹  
し復古の偉業を肇め給ひ明治元年江戸を改めて  
東京と稱し尋で車駕東臨し其翌二年を以て永く  
百敷の宮居を此地にぞ奠め給ふ爾來城市齊整人  
口幅濶文物旺盛商工諸業日に興り月に盛なり嗚  
呼偉なる哉府民舉て此日恭く祝場を設け天神地  
祇に祭り聖徳の無量を頌し奉り帝都の万歳を祝  
すあり此期に際し弊堂大に後の世までも紀念の  
爲め本畫報を臨時増刊して記事に繪畫に市中の  
景況祭場の模様をも寫して永く紀念に備へんと  
す乞ふ發兌の日を俟て

發行所

東陽堂支店

(電話本局九七〇)

神田區通新石町三番地

遞信省鐵道局御藏版

# 大鐵道線路圖

正價金壹圓五拾錢  
郵税金六錢

右は曩に許可を得て發賣せし以來非常の好評を得初版及  
再版共直に賣切れ久しく品切の處今般更に訂正第三版を  
發賣す○本圖は我邦現在官私設に係る鐵道線路の大体を  
舉げて其位置方向を明示するを以て目的とせり故に既成  
營業線路は勿論其建築中にあるもの及び布設許可の本免  
狀を下附せられたるものは悉皆記載して一も遺すものな  
し沿線の都邑宿驛大道路路の如きも亦務めて之を正確に  
せられたり又本圖に添ふるに日本鐵道一覽表を以てせり  
同表には一面に線路一覽表あり一面に既成鐵道停車場及  
哩程表あれば我邦の鐵道線路の如何を知らんと欲する者  
本圖を閱覽せば以て一目瞭然たる其圖なり江湖の諸君子  
速に購讀して鐵道の事を知るに後れ給はざらん事を請ふ  
神田區通新石町(電話本局九七〇番)

發賣所

日本橋區通三丁目

東陽堂支店

丸善株式會社書店

臨時  
增刊

風俗書報

第百六十三號

隅田堤中

明治廿一年  
四月十日

東京  
東陽堂

發行

新撰

# 東京名所圖會

第十三編







○隅田堤之部 (中)

●水戸邸

水戸邸と稱するは舊水戸藩主徳川氏の邸宅にして。新小梅町。即ち枕橋の北畔に在り。小梅昔は梅香原と稱せしよし。三圍神社の縁起に見ゆるも。天正日記に已に小梅村とあり。しかれば昔よりの唱へならむ。新編武藏風土記小梅村の條に。小梅瓦町小梅代地町、小梅五之橋町等の唱あり。各古は百姓商家なり。此内瓦町は。萬治の頃。其所の百姓所持の田地。御用地となり。宅地のみ残されしかば。寛文中願上て百姓町場とし。代地町は水戸家の藏屋敷出来しとき。御用地となり。かゝれば初めは藏屋敷なりしにやと思ひしに。同書須崎村の條に水戸殿抱屋敷。當村の飛地にして。小梅村藏屋敷の前に在り。一段五畝七歩とあり。されはもとば藏屋敷と相接してありしを。其の後合併したる者なるべし。今は五六萬坪にて。大池も其の内に在り。明治廢藩の際徳川氏此の邸に移られ。永住の所とせられたり。舊藩士の邸内に住する者數十戸あり。廿九年十二月十八日海軍聯合短艇競漕會を隅田川に開るゝに方り。本邸を以て聖上の御展望所と定められたるに因り。夜業を爲して。新築工事を急成し。新に枕橋に面して石橋を架し表門を建て。舊觀を一變せり。

●弘福寺境内の現況

弘福寺は。本所區向島須崎町に在りて。即ち隅田堤畔なる牛島神社の東に當れり。境内總坪數四千坪餘あり。入口に不許葦酒入山門の石標を建つ。此を過ぎて進むこと十餘歩にして。黒門あり。門を入れは。正面に壯麗なる大伽藍あり。之を弘福寺の

佛殿と爲す。昔し輪奐離奇を極めたる境内の諸殿堂樓宇は。天明安政兩回の火災に罹りて。現今唯此一堂を殘せるのみ。其入口の左右に聯あり。曰く。

福地弘開鏡象集

玄門高聳聖賢臨

ど。又稻間を仰げば。大雄殿と書せる巨額を掲ぐ。更に高く屋上を仰げば。牛頭山と書せる巨額を掲げたり。此聯と牛頭山の額は。鐵牛の筆にして。大雄殿の額は。隱元の筆に係れり。既にして戸内に入れは。正面に釋迦佛を安置し。左右に聯あり。鐵牛の筆にして其文左の如し。

覺天日月久晦祖燈雲燦燦

半天雲雷普霽林木盡華榮

釋迦佛尊の左右には慈觀堂などありて。各々聯を掲げ。左の如きの句あるを觀る。

一株老桂長垂蔭

萬斛天香遠襲人

正宗眼桑城初日

眞見智度峯嫡孫

此の一株云々の二句は。鐵牛の筆にして。正宗云々の二句は。當山第二代嗣法門人祥瑞鳳拜題とあり。本堂の右の方には。井伊家及び本多家等の位牌を置き。左の方には。池田家及び稻葉家等の位牌を置き。今此等の事は詳記するに遑あらず。

本堂を出れば。西に庫裡あり。是れ亦佛殿と同く天明安政の火災を免かれたるもの。庫裏を離れて少しく南に爺孃の石像あり。小兒の咳病に靈驗ありとて。詣客常に絶へず。此他本寺の由來等は後に詳記するを以て略す。

●弘福寺境内の舊況

本寺の境内の舊況は。大に現今と異なるものあり。今左に釋敬順の遊歴雜記を掲げて。舊況の一斑を知るに供す。牛頭山弘福寺は。牛の御前の東に隣り。株木門を越。折曲て



表門は異風に作り。中央に當寺開山の額をあげたり。此門を入て。右の方に天柱石と彫たる御影の手水鉢あり。長さ凡三間。恰鳥居の立木に似たり。此間に太秦形の大燈籠一基あり。甚若むして古雅に見ゆ。又折曲りて左の中門には。表の方に布袋をやすんじ。裏の方には毘沙門天を安置し。此門を入て。北の中央數十歩に本堂あり。大さ十餘間。軒下に大雄殿といへる横額をあげたり。座禪堂は右に。僧房は左にあり。境内尤廣く。寂寥として只野猿の聲のみ聞ふ。その模形左ながら目黒白銀瑞聖寺の面影あり。なを又諸目のつゞまやかに掃除の行とゞきたる此宗門にならぶ寺院なし。又當寺に春日局の木像ありて。稱福せし立像なり。例年兩三度づ開帳せり。是は稻葉丹後守が菩提所なればなり。春日局の一件は。湯島麟祥院の條下に明せるが如し。門前には。土手を像りて。音に聞えし太郎といふも。むかしの様に似も付ず。今只都鄙の來賓を饗應調理に手を盡し。家富榮ふるものは武藏屋のみにして。大黒屋これに繼べき歟。今世の中むかしとは抜群に超過し一切の料理に庖丁を巧みにし。菜數の取合せより調味と器物を第一にし。所謂八百善。きんは樓。二藤。中春亭をはじめ。粒だちし酒樓みな腕をこく事とはなりぬ。取分菓子類にいたりていふも更なり。世くだり。人氣拙しといへども。總ての事までも文華のひらけたるに於ては。むかしもあよぶべからず。

### ●弘福寺

當寺は。山城宇治黃檗山萬福寺の末寺にして。黃檗宗なり。現今は荒涼落莫。佛殿其他二三を餘すのみなれども。明治維新已前にありては。規模宏壯輪奐の美を盡さずと雖も。而も七堂整然として。自ら大叢林の規格を具備し。加ふるに土地閑雅にし

て江東第一の勝區に屬す。當寺は。元葛西善左新田字森島(今の隅田村)にありしを。延寶二年前の將軍殿有院殿遊獵の途次休憩せられ。監院某を見て。現今の地を賜はりしに因り。移轉設立せし者にして。即ち洲崎葛西三郎清重の古跡なり。其舊地は。元天台の一小刹にして。現今尙當寺の庫有として。永く其區域を存せり。

開山は黃檗三代木庵和尚の上足鐵牛禪師にして。稻葉美濃守正則公の歸依に因りて。當寺を開創せらる。抑も禪師は法徳高く深く世の渴仰を惹き。其師木庵國師。法弟鐵眼禪師と共に黃檗宗を大成せし者として知られたり。蓋し禪師か威徳の高きことは。盛んに法幢を樹てしに徴して知るべし。葉室大納言。伊達陸奥守綱村。稻葉閣老正則。池田因伯太守等の列侯宰臣の歸依最も篤く。洛の葉室。奥の大年。因の興禪。相の長興等の諸大寺は。皆帥の創設に係り。其規模壯大なることは本山萬福寺に譲らざりし。其他總の普陀山を開き。椿海十里を開拓せる等蓋し枚舉に遑あらず。

當寺を開創せしは。禪師か晩年の事業にして。稻葉閣老美濃守正則と稱す。元祿九年没し潮信院泰應元如と法諱す。其基を開き。池田因伯。伊達興州。井伊兵部等の諸侯伯。及び篤信の獻贊に依り。禪師亦衣資を投して其營辨を助け。未だ期年ならずして。壯大の堂幢竝に成り。接化の道俗常に幾千を告げ。以て末後の道場を期せしも。法縁未だ盡きず。化道十年。去て總の普陀山を開き。還りて世壽七十三を以て。洛の葉室山淨住寺に遷化せらる。當寺は。即ち禪師か創設せる關東四刹(瑞林、長興、普陀、弘福)の隨一なり。

當寺の山號を牛頭と云ふ。城外の良位に在り。地勢亦臥牛に類し。加ふるに禪師の法諱牛字なるを以て此號あり。

天明。安政兩度の大火は。開創已來の規模を壞り。諸堂寮舎を毀ちて。佛殿及庫裡の一部を餘すのみなるも。其已前の諸堂伽藍を擧ぐれば。

佛殿は。二重造りにして。木材は唐木を用ひ。其構造は山城宇治黃檗山の本堂に擬す。本尊は。釋迦牟尼佛の座像にして長三尺。脇立は迦葉阿難の二尊者にして。長三尺五寸。立像なり。其匠作は本所五ツ目羅漢寺の五百羅漢尊像を彫刻して有名なる佛師松雲禪徳の手に成り。其非凡の意匠は。佛威と共に世上に赫々たり。

天王殿は。其模型を山門に同ふし。佛殿の前面に在りて。下階に多聞增長總持廣目の四天王を配置し。樓上に彌勒菩薩を奉安す。是れ佛師松雲の製作にして有名なりき。

選佛場は。即ち禪堂にして。佛殿の右側に在りて觀世音菩薩を安置し。參禪辨道の處としたり。齋堂は。佛殿の左側に在りて。一山僧衆の齋場即ち食堂なり。

浴室。省行堂(一名病僧寮と云ふ) 方丈(佛殿の背面に在り。住持常在の處にして。亦參學者入室の處たり)

達觀臺。心印室。千秋亭等は。或は靜觀三昧に入り。或は禪餘悠々自適の處なり。千秋亭の如きは。禪師自ら之を杜子の室に擬す。其他開山堂。鐘樓等は。安政の震災に罹りて。未

た再築の機を得ず。境内に爺爐の石像あり。元開基稻葉侯小田原の領守たりし時。偶然其邸内に於て發見すと云ふ。舊記の傳ふる所に據れば。夢に君公に託言する所ありと。其守地を山城淀に轉せらるるに際して。此石像を當寺に移さる。爾來小兒の咳病に靈驗ありとして詣する者甚た多し。

又境内に古井あり。古來名けて白蛇井と云ふ。其水色宛も白蛇

の生息せるか如くにして。四時曾て其量を減せず。天柱石は。長さ九尺餘の自然石にして。米津周防守の寄附せし者なり。

墓碑 俳人建部涼俗。儒士林東溟。南宮大湫及び藤原紀隆。井上喬卿。古郡公緯。俳人龜成等の墓碑あり。

寶物 開山鐵牛禪師血書華嚴行願品五卷。及海保某の喜捨せる唐畫布袋橫幅(筆者不詳)蘆屋釜等は。當寺什寶中の重なる者なり。

靈元院太上法皇の御宸翰 除惟普照宗燈傳至於紫雲克大其光輝鐵牛棧和尚久慕玄風近聞語錄道眼圓明機辯迅捷宏起邢氏蔭涼樹轉靈山正法輪屢嘗道味所容良多實是人天福田吾國僧寶徵猷可嘉簡在朕心故

特謚賜大慈普應禪師之號以旌厥功永垂萬世 正徳二年八月十四日

### ●秋葉神社境内の現況

秋葉神社は。本所區向島請地町に在りて。隅田堤畔の牛島神社より東の方二町餘なり。木鳥居本社の南方町許に在り。是より進むこと十數歩にして。道上に圓石柱を建つ。即ち秋葉神社の常夜燈にして。裏に守田治兵衛。圓城半右衛門と刻せり。守田治兵衛翁は。寶丹を賣るを以て名あるもの。本社信徒の一人にして。常夜燈の建設に力を盡せりと云ふ。故に隅田堤上三圍祠前より水戸邸畔に到るの間。三基の常夜燈ありて。其石柱に刻する所の字は。皆翁か書する所に係れり。之を過ぎて北に進むこと十數歩にして。路東に五六の石階あり。之を登れば即ち秋葉神社境内なり。先づ階北に手洗場あり。階南に神樂堂あり。昔しは堂内に不動を安じ。結界堂の三字を扁せりと云ふ。是よ



私福寺之圖



り北方十餘歩を距るの處に當りて。朱塗の社殿あり。之を秋葉神社の拜殿と爲す。神威と書せる巨額を掲ぐ。六童文山の字あり。拜殿に上りて仰き觀れば。亦金文字の一額あり。金鼓音の三字を書す。關思恭の筆する所に係る。其他扁額は數多掲げあり。就中鷹の圖を書けるもの尤も多し。此等は皆藤原正永。藤原正珍。藤原親睦等の奉納せるものなり。本社の前に石燈籠七基あり。各々寄進者の姓名を刻す。左の如し。

奉寄進石燈籠。秋葉大權現御寶前。寶曆八戊寅年三月十八日。伊奈源忠宥

從四位下少將酒井雅樂頭忠舉女。從四位下侍從松平甲斐守吉里室。源頼子

從四位下行左近衛少將兼雅樂頭源忠舉

伯耆守從五位下藤原正永

境内の東南隅に鎮火祭場あり。毎年十一月十七日十八日の兩日此に於て火焚神事を執行せり。當日詣客甚だ多し。又境内の西位に一小社ありて甲子神社といふ。社内に大黒神の石像を安す高さ三尺許りなるべし。明治維新以前は之を朝日大黒と呼へり其神像の東方に面するに因りて名けしなり。聞く。昔し萩原平作といへる豪腕師あり。深く此大黒神を信じ。日參怠りなきに因りて。終に其家の富榮を見るに至りしと。爾後此神像を尊信する者漸く繁く。近年に至り。參詣する者日に多きを加へ皆以て靈驗甚だ多しと爲す。

境内名花異草なしと雖も。老銀杏樹及び數樹の長松高く雲霄を摩するあり。夫れ境目ら幽なるを以て。一たひ此間に臨めば。忽ちにして紅塵煩熱の苦を忘るゝに至るべし。境内を離れて。舊礎を降れば。前に數百坪の廣地あり。年々春時に際すれば。茶亭數屋を構え。遊客をして憩はしむ。故に墨堤觀櫻の客。迂

路此に臨み。歌ふ者。舞ふ者。各體を極めざるはなし。特に其地域甚だ廣きを以て。尤も學校の運動會を開くに適せり。珍羞佳膳なしと雖も。生を養ひ氣を培するは餘りありと謂ふべし。其西隅に一松樹あり。枝條四垂して其形甚だ佳。所謂千葉の松といふものか。

社務所は鳥居側に在り。社掌千葉常善氏此に住す。千葉氏は。祖先業榮以來本社に奉職せり。今の常善氏は。即ち業榮より九代目に當ると云ふ。聞く。本社は氏子に因りて成るに非ずして信徒に緣りて成るなり。信徒は府下各區に甚だ多く。祭禮當日の如き。皆奮て其式を助くと云ふ。

●秋葉神社境内の舊況

昔し本境内に。紅葉の奇觀を極めたることは。江戸名所圖會。墨水遊覽志等に載せ。飼儀ありて詣客に戯れしことは。懷反古。名所圖會に載せ。神泉の松と稱する樹の空より清泉湧出して。諸病に奇効ありしことは。江戸砂子。名所圖會等に記せり。今釋敬順の遊歷雜記を視るに。左の記事あり。閱讀して以て境内の景況の大に今日と異なる所を知るに足るべし。

秋葉權現は。弘福寺の東北三町にありて。別當を満願寺といえり。茶事を内藤萊翁に學びて。眞置流を修習し。萊翁元より予と斷琴の交り深ければ。天明年間の頃は。たゞく萊翁と爰にあそびしが。權現の境内廣ければ。中央には泉水を巧みに作り。北通りには山を築き。種々の景樹を植ならへ。取分松は名たゝる本所なれはいふもさらに。池水の四季には。どころく茶店をもふけ。春は梅花の純ひし晨より鶯の聲に浮れ。程なく墨田堤の櫻より爰に逍遙して。諸木の芽吹を愛し。猶池邊の杜若の水面に映じて。江戸生立に所縁おかく。或は郭公のはつ音聞んとては。杜鵑花のうるはしきに足をと



いめ。秋は秋の花咲頃よりもみちうつろふゆふまで。四時の佳興又一品ありて面白く。且此地の秋は。八月の節より五日目頃を最中とす。又東のうら門を出れば。右は杵川四ツ木へ程近く。左は白鬘木母寺等へ遠からず。頓て川添の堤にあがりて眺望すれば。北は墨水の流れ清く。帆あけて走る船あり。又は三絃のつれ弾に漫興をそふる屋形船。扱は釣を垂。網を打。或は鱸おし切て猪牙の急くは。思はくありて又面白く。川向は。北は石濱の神社より。南は中洲のあたりまで。川丈凡四十餘町。みな一望の中にありて。風色にいたりては兎角の論なし。扱又秋葉の門前には。名たる酒樓は。山海の美味数を盡して調理し。洗ひ鯉の一品なり。總て數十軒の調理家。庖丁の巧みと器物の取合せを専らにし。又庭前の摸形に山林を移し。とこみくの家作は。數寄を好みて雅趣を交たり。殊に近年此あたりに松樹一式を愛して植ならへたのしめる隠者あり。或は菊花を作り。楓樹と梅檀のもみぢして燃るがこときをたのしめる雅人あり。

### ●秋葉神社

秋葉神社は。其鎮座年代詳ならず。或は云ふ。正應年間の創立に係ると。祭神は大己貴。火産靈の二神なり。明治維新以前は。千葉山満願寺別當たりしが。神佛混交の禁を設けられしより。満願寺別當の職を解かる。然るに江戸名所圖會には左の記事あり。

弘福寺より三丁あまり東の方請地村にあり。遠州秋葉権現を勧請し。稻荷の相殿とす。權輿知るへからず。或は云。正應年間の勧請なりとも。別當は三寶寺末寺にて。千葉山満願寺と號す。又懷反古にも

受地村五百崎の五社稻荷の社に遠江國秋葉山三尺坊大權現を移し。火防の御神と勧請して。別當千葉山満願寺といふ。千葉介の建立と云や。

秋葉の神體は天狗の形にて。右に劔。左に縛の繩を持。火焰を吞負ひ。白狐の上に立り。長一尺餘。本地佛は正觀音にして長五寸餘。元は村民與右衛門といへるもの持傳へし像なり。在家に置へきに非すとて。元祿十五年。申興開山葉榮に讓與へりと云。祭禮十一月二十八日。千代世稻荷は。右に劔。左に寶珠を持。白狐の上に立り。長九寸。本地佛十一面觀音。長六寸餘。縁起あれど。考證すへき事なければもらせり。

どありて皆本社社の祭神を以て秋葉三尺坊となせり。然れども本社社の祭神は前に記する所の二神にして。決して秋葉三尺坊を勧請せるものに非ず。武藏風土記は。秋葉三尺坊云々と記せずと雖も。天狗の形云々の語に據れば。是れ亦秋葉三尺坊と爲せること明かなり。故に此に敢て是正す。

隅田川叢誌に。秋葉神社。正應年中の創立と云。始め千代世稻荷と云社ありしを。元祿の頃。別當満願寺秋葉山を合殿に鎮祭す。祈願の利益顯然なるに依て。本多某侯の報賽にて。社殿を造營し。種々の寄附物ありしより。益々繁榮したるよし。とあり。然るに明治維新後は。秋葉を本稱とし。千代世を以て合殿とせり。然れども今は千代世の稱なし。改めて其祭神を宇迦之御魂。少彥名。天之日鷲の三神とせり。本社社の祭日は即ち左の如し。

- 大祭 十一月十七日十八日
- 中祭 四月十七日十八日
- 小祭 毎月十八日



大祭日には。社前に於て鎮火祭を執行すること前に記するか如し。又當日に限りて。火防の御幣を信徒に頒つを例とせり。故に遠近より輻輳して。境内雜選せり。又本社にては。毎年十一月酉の日を以て西祭を執行せり。是れ祭神天日鷲命なるに因りてなり。此日信徒より神樂を奏せしむ。獨り境内のみならず。傍近まで大に賑へり。

●秋葉神社取調書

秋葉神社の事に就ては。同社々堂千葉常善氏の取調へられたる者あり。因て乞得て此に掲ぐ。

一村社 秋葉神社

祭神 大己貴神

火産靈神

合殿 宇迦之御魂命

少彦名神

天之日鷲神

一事由 鎮座年月日不詳往古は小祠なりしを元祿十五年十二月千葉葉榮再興す

一建物

本社 間口三間三尺

坪數六坪五合

元祿十五年造立

幣殿 間口二間

坪數八坪

同上

拜殿 間口六間

坪數十八坪

同上

神樂殿 間口二間

坪數六坪

文久三年五月改築

木鳥居 幅二間三尺

弘化二年改築

表門 幅一間三尺

明治十二年改築

裏門 幅一間二尺

大破に付取毀有之

手洗所 間口九尺

坪數一坪五合

文久三年五月改築

一境内末社

甲子神社 社殿間口六尺 坪數八合三勺 明治十三年八月造立

祭神 大國主神 社殿間口三尺 坪數二合五勺 大破に付取毀有之

大國主神社 祭神 大己貴神 千葉神社 社殿間口六尺 坪數二坪 嘉永元年二月改築

所祭 千葉葉榮之靈 千葉神社は寛延三年本社再興の功を頌して之を鎮祭す

一寶物 一軍配團扇 一個

武田信玄自作革製金銀箔塗り柄黒塗り小判形縦九寸横八寸三分柄長さ一尺三寸六分金蒔繪武田菱紋寛保元年酉八月雨宮庄九郎孫雨宮吉左衛門寄附

一金剛般若波羅密多經 一卷

紺紙金泥無銘管家の筆と云傳ふ寛延三庚午年三月本多伯耆守藤原正珍寄附

一劔 一口

白鞘にて銘隱岐守子孫藤原國持こみ裏。菊の紋有之寛延三庚午年三月本多伯耆守藤原正珍寄附

一冠 一個

延享三年寅十一月一條關白太政大臣藤原兼香公寄附

一鈴 一個

無銘にて寸法一尺四寸九真鍮打物目方百十奴箱蓋に延享三年寅十一月一條關白太政大臣藤原兼香公寄附とあり

余嘗て其寶物を拜觀するを得たり。信玄公の團扇及ひ般若經の三種。尤も稀世の珍たるべし。團扇は。所謂陰團にして。周圍に。十二支を十二月に配當したる文字あり。是れ孤虛王相を表したるものにして即ち信玄公の白筆なりと云ふ。般若經は

を



正楷の金泥文字にして。凜として犯すべからざるの風あり。傳へて菅家の筆と爲す。劔は。藤原國持の銘あり。光芒眼を射。人をして一見膽寒からしむ。此他冠といひ。鈴といひ。亦一見するの價あり。

●維新以前の信者

本社信徒の多きことは略前に述ぶる所の如し。今明治維新以前の諸大小名中信者の姓名を得たれば。之を左に掲ぐ。

- 一御本丸大奥
- 一西丸御奥
- 本郷御守殿 霞ヶ關御住居 龍ノ口御住居
- 一ッ橋御守殿 三田御住居 紀伊御殿
- 姉小路殿 梅谷殿 本多紀伊守殿
- 仙臺中將殿 松平安藝守殿 松平越前守殿
- 松平相摸守殿 松平内藏守殿 松平土佐守殿
- 伊達遠江守殿 松平大和守殿 酒井雅樂頭殿
- 酒井左衛門尉殿 松平下總守殿 松平能登守殿
- 松平日向守殿 高木主水正殿 松平豊前守殿
- 加納備中守殿 永井肥前守殿 松平伊賀守殿
- 立花左近將監殿 有馬遠江守殿 織田攝津守殿
- 堀田備中守殿 松平豊後守殿 諏訪因幡守殿

●境内の諸碑

●鳥塚 表に明治十六年七月。春洞生書。芝鳥森珍鳥亭。中根喜代女建之。宮龜年鑄之とあり。裏に左の文あり。

應需 假名垣魯文 識

その暗聲やかなしとあるに。中根喜代といへる女。近きころ。燒鳥と名付し割烹をもて業とするより。かの障り消ん爲とて。此神垣にしるしの塚一基を築く。こはこと問んとよまれし鳥

の名所にねなし地なれば也。

●秋長堂の碑

もみち葉を折てほしやといふ顔の色を先へみてとられけり

秋長堂 河井物鏡

裏に于時文政八乙酉歳早月吉辰建之とありて。其下に春秋庵永女以下七十一人の姓名を列したれども之を略す。

●東杵菴の碑

けふもまた飛すに居たり閑子鳥 三世東杵菴願言

●立齋廣重の碑 歌の下に人物の像ありて。二世廣重謹圖とあり。

東路に筆をのこして旅の空にしのみくにのなとところを見ん

立齋廣重 榮 中 書

裏に明治十五年歳在壬午四月良辰とありて。其下に二代目立齋廣重以下八人の名を刻しあれども略す。

●柳畑

柳畑は。隅田隄の東畔長命寺の北に在り。昔時柳樹多きを以て此の稱を存せり。今は特に見るべき者なし。唯々田嶋相接し。溝渠相通し。稍々閑雅の趣あるに因り。嘗て成島柳北。依田百川。及び榎本子爵に居を占められたり。今や成島氏已に逝て子孫其の居を移し。依田氏亦他に轉し。榎本子爵のみ依然として幽居せらる。想ふに新涼廬に入り。燈火親むべきの候。陰蟲囀々の聲を聞き。子爵の感懐いふべからざる者あらむ。柳畑柳楊の春に乏しく。却て秋聲に富む。亦古今の變なり。

●白鬚神社の現況

白鬚神社は。南葛飾郡寺島村。即ち隅田堤の東畔に在り。境内



は甚た廣からずと雖も。高木老樹鬱蒼として四境を蔽ひ。近く  
瀑水を望み。遠く富士を眺めて。其景色頗る愛すべし。本社は  
北隅に在り。石階を登りて到るべし。階上左右に狛犬あり。其  
右なるは。刻して奉納御寶前。松葉屋半左衛門といひ。左なる  
は。刻して奉納御寶前。八百屋善四郎。駿河屋市兵衛といふ。  
共に文化三年の奉納に係る。狛犬を距ること少許にして。石燈  
籠あり。嘉永二年次歳己酉五月吉日法橋胡民齋と刻す。是より  
敷石を踏むこと數歩にして。即ち本社なり。本社は。素木造に  
して。白鬚社の額を掲ぐ。春洞居士石川應敬の書する所なり。  
本社南東に水神社あり。南西に神樂所あり。神樂所の側石燈  
を下げは。一屋あり。社掌今井直氏に住す。境内の東南部  
に碑碣數多あり。之を玩讀するも亦一興なるべし。

### 白鬚神社

白鬚神社は。祭神猿田彦命にして。祭禮は九月十五日なり。昔  
しは眞言宗西藏院之が別當たりしが。明治維新以後。神佛混合  
の禁を布きてより。今井氏之を掌るることなれり。相傳ふ。  
天曆五年。元三大師關東下向の時。近江國志賀郡打越なる白鬚  
明神を勸請したりと。神體は。元三大師の作にして長一尺の  
立像なり。天正十九年。社領三石を給ひし由。されど武藏風土  
記に據れば。其後は免除の地なく。社地のみ僅の餘地なりとあ  
り。

### 白鬚神社の由緒

白鬚神社の社掌今井直氏より官府に録上したる由緒調書は左の  
如し。  
東京府武藏國南葛飾郡寺島村大字寺島字北居村  
村社 白鬚神社  
一祭神 猿田彦大神

### 合殿

天照皇大神  
高皇彥靈神  
神皇產靈神  
大宮能賣神  
登由宇氣神  
一由緒 鎮座之原者近江國志賀郡打越に鎮座白鬚大神の分靈  
にて天曆五辛亥年。釋良源が遷祭れりと申傳候。合殿鎮座  
年代不詳候。

- 一本社 間口二間 奥行二間三尺
- 一幣殿 間口二間 奥行二間
- 一拜殿 間口三間 奥行二間
- 一祭器置場 間口二間 奥行二間
- 一社務所 十二坪
- 一組建神樂所 間口二間 奥行二間三尺
- 一石鳥居 一個
- 一木鳥居 一個
- 一石手洗鉢 一個
- 一石彫獅子 一對
- 一石燈籠 二對
- 一鐵用水溜 一個
- 一組建梓木 一組
- 一境内四百九十坪 官有地
- 一立木 六十九本
- 一神輿 二連
- 一境内末社 一社
- 水神社 彌都波能賣命

### 合殿

- 速秋津比古神
- 速秋津比賣神
- 伊邪那岐命
- 伊邪那美命
- 倭健命

### 境内の諸神

- 一鎮座原由不詳
- 一社殿 間口五尺 奥行五尺
- 今日庵元風の碑  
こゝろほどことはのたらぬさくらかな 四世今日庵元風  
裏に天保七年丙申之春。男董翁松本盛美書并建。石工喜松鐫  
とあり。
- 長雄の筆塚  
文化十五寅八月山鳥島こへ  
長雄 筆塚 中原耕張  
つくくしつめよ硯のすみた川
- 黒人塚  
右横に 天也生此人天也亡此人此人何人去崑崙倚一人  
左横に うつせみのうつゝにゑはしすみ田川  
わたりそはつるゆめのうきはし
- 裏に 姓北島名玄二號黒人其先出於源氏也寛政十二年庚申春  
三月題書時年七十五。
- 桑楊菴の碑  
久かたの天津をどめもうらやまん人間界の花のしら雲  
裏に文政二己卯歲霜降月とあり
- 春秋菴の碑  
人こひし火ともしころをさくらちる

### ○岩瀨鷗所の墓碑

裏に于時文化歳在癸酉春三月。拙堂創建之。補助居行。  
岩瀨鷗所之舊臣白野夏雲。一日携其行狀。訪余曰。鷗所之  
死。距今二十三年。家道衰替。將無傳于後。因欲建石刻其遺  
行。請爲之銘。嗚呼。余之與鷗所君。平生之舊。情義之敦。出  
處之同。有不宜以不文辭者。初余知君於茗溪學校。一見如舊。螢  
雪切磨。其誦則朋友。其情則兄弟。及就官。又同趨走殿廷。  
戮力服勤。乍勞乍悴。遭遇亦如合符。有不偶然者。而君獨一  
屈不伸。哀哉。君諱忠震。字善鳴。號蟾洲。後改鷗所。爲林  
述齋先生外孫。好學才識明敏。癸卯。及第爲教授。阿部閣老  
薦其才。擢徒頭。累遷監察。方此時。米國軍艦來浦賀。幕廷漸多  
事。革舊貫。布新令。築砲墩。鑄巨煩。製大艦。創海軍。衝  
禦之業盛興。而君無不關其事。拮据不暇。又外國使船之來。  
求交通者。無論港口遐邇。令君爲之迎接。故以特旨叙五位。時  
幕議與朝旨有不相協者。隨堀田閣老到皇都。辯宇內之形勢。陳  
和戰之利害。欲以適時變全國威。而群議蜂起。遂不協。同還遷  
外國奉行。鈴英米佛魯蘭五國和親貿易條約。定其章程。轉作事  
奉行。君之在憲臺也。其所建議。析利害。明是非。必盡其所見。  
不肯希旨曲從。又有藻鑑之明。常汲々於養才取士之事。故幕  
末知名之士。多出於其識拔。其於國家可謂勤且勞矣。既而以  
嘗所廷論有忤權貴之意。奪職廢錮。不許與人交通。於是絕意  
于人也。益讀書講文。時發愛辭于歌詩。以自遣。不區々爲子  
孫之計。殆若欲優游卒歲者。文久元年七月。天奪其壽。以病  
卒。享年四十有四。諡曰爽快。葬白山蓮華寺先塋之次。君元  
設樂氏。岩瀨忠正養爲嗣子。配其長女。後娶律田氏。三男。  
皆早卒。六女。其三適人。銘曰。於戲爽快。其貌也揚。眉秀  
眼明。才敏氣昂。臨事勇往。曾不隄防。駭機忽發。垂翼臥牀。







精意丹青。追倪慕黃。不作不愧。爰歸其藏。

明治十六年四月湯東岐雲園居士永井介堂撰并篆額并書

白野夏雲建

○白髭神社の碑

此御社は。近江國志賀郡境打下に鎮ります。白髭大明神を爰に齋奉れるなり。其故よしは。天曆五年頃。比叡山より元三大師東に下給ひし時。夢のさとし有て。此隅田川の汀にいはひ奉れりぞ。其後天正十九年に。神領寄附せさせ給ひ。彌神威を益し給ひぬ。白髭大明神は。猿田彦命にましく。靈驗多きか中に。人の壽命を護給ひ。又海川を行通ふ船の風波の難を救ひ給んとの神慮なる事。縁起にくわし。此たひ御社修理し奉るに依て。此碑を建るなり。

享和二年壬戌二月

武藏國葛飾寺島村

白髭大明神別當 西藏院興元識

應需

橘 千蔭書

○墨水三絶の碑

維舟渡口步汀洲。來飲祠前賣酒家。一道玻璃煙淡抹。夕陽猶在半堤花。不借朝南暮北風。遊船如織日忽々。沙鷗欲管繁華事。間睡落花流水中。斷磬聲中結夕陰。堤岸綠絲寺門深。鷗邊柳處之陳迹。附與詩人吟至今。

上毛淡齋佐羽芳詩壬午冬日書詩佛老人大窪行

上陽佐羽淡齋有勝情焉。有勝具焉。是以靈區名勝靈蹟。靡不遍探矣。其題詩者凡一百所。皆次第而勒之石。墨水名勝甲于關東。三春之候。芳塘千頃。蕪櫻花於濕銀鏡之面。九秋之間。蘆灘十里。泛素月於玻璃玉壺之中。以及寶塔華表。長橋短約。眾

師晚唱。罍船夜火。皆如在畫圖。洵足增溪山之勝景矣。淡齋所以有一詩也。 鷗齋老人題 陶齋省吾書

○亡友蒼山衣劍之藏

于嗟乎。蒼山以端直弘遠之材。師事綾瀨先生。學宗實踐。行由篤敬。是以親安之。人任之。若其文章。則亦足以寄道於悠久矣。嘗欲以斯學問之世。而皇天不弔。一臥形骸歸溟漠。于嗟乎。哀哉。斯人而亡。豈特斯人之不幸耶。今春值小祥之忌。同志相議。卜地墨江之瀕。取其衣劍。招魂而瘞之。今夫衣劍不屬於形骸者。死而有知。魂必不來遊矣。雖然古人脫劍帶丘墓。猶足慰其神矣。況手澤存焉。則不魂兮歸來乎。乃瘞衣劍。薦鷄酒而祭之。魂兮其歸來。

天保癸巳春三月

友人

金陵 芳野愿撰

盤谷 鈴木毅書

海若寺本永篆額

蒼山諱敬直。字義方。稱大三郎。小野田氏。號蒼山。父名長勝。母長谷川氏。世仕 宇都宮侯。特 召近侍。以天保壬辰三月廿六日沒。年二十四。葬市谷善慶寺。文集傳于家。行欲錄梓問于世矣。

愿再識

窪世祥鐫

○空谷等周先生衣幘之藏

先生以畫名天下久矣。方其少也。殫慮繪事。博訪之時匠。一無足與議者。於是慨然自奮曰。江山吾師也。何陋時蹊之爲。乃擔簞負笈。歷山東關西。繼入京師。及登東山。見一禪刹。方老衲隱繩床而坐。皓首鬚眉。梵相奇古。童子執杖侍立。乃扣問師名。始知順世長老。爲雪舟翁嫡傳焉。拜而求法。長老謂自先師雪舟嫡々傳相。至老僧已十世。此道非易。難傳真也。人知子苦心



求法。何忍阻來情。乃悉取秘訣而授之。又西遊訪雪舟遺蹤。攬山川流峙之勢。風雲慘舒之變。而措之絹表。意匠騰發。若有神助者。先生自少好馳馬。每值酒後耳熱。揮策操轡。步驟數回而止。其周旋疾徐。莫不皆中矩矱矣。嘗謂吾於繪事。經營結構之法。傳彩調鉛之度。由是得之。然及其變幻不測。私心所獨知。而人所不能測也。先生捐館。既數年矣。友人相議。卜地隅田川之瀨。瘞先生之衣幘建石表之。舒交義也。夫衣幘也者。雖形外之物矣。手澤猶存。若魂氣則無不之也。無不之也。異日神遊於斯。亦足以慰先生哉。

文政戊子仲春

東都

綾瀨龜田長梓撰

海若寺本永篆額

門生八歲童清水孝書

碑陰

等周姓川村氏。號空谷。下總人。畫宗雪舟。得其神髓。嘗西遊之日。獲一方竹刀。謂明鄭成功公之物。等周固慕公之義。獲之。大喜。常佩服不離身。因又號竹翁焉。其友清水武者。江戶人。雖居閭巷。好讀書愛山水。輕財重然諾。與人交。死生不變。實一奇士也。等周之死。乃唱義。與同士謀。乞文於綾瀨先生。勒之於石。建於墨江塘上。以表其交義焉。武之子。名孝甫。八歲。與姊美智俱從綾瀨先生學。又受書於寺本海若子。海若子之書。出於鵬齋先生碑文之命。孝書之。筆力遒勁。氣態橫發。有壯夫橫槊之勢。又使美智書文於碑陰。字格婉麗。綽約動人。皆可以觀書法之所淵源也。嗚呼。等周之所慕與所交。可謂皆得其人矣哉。而余今日得書碑陰。亦默契等周平生所訴於其心乎否。

北總

淵齋昆常撰

文政十一年戊子二月

十二歲女清水美智書

### 蓮華寺の現況

蓮華寺は。南葛飾郡寺島村に在りて。白鬚神社より東南方二町許なり。門は南に面す。門を入れば。右は竹藪にして。左に小池あり。松楓其側に雜植して。稍風致あり。聞く明治維新以前は。本寺の境内頗る廣闊にして。兒女の向島に遊ぶ者は。多くはこゝを以て運動場に充てたりと。然るに維新以後。境内の地多く西隣なる池田氏の庭園に歸せしより。境内狹窄にして。運動場に充つべきの餘地なきに至れりと。本堂は境内の北位にあり。生駒不動尊を安置す。本堂の前に小堂を立つ。昔し堂内に佐介稻荷を祀りしが。維新後。神佛混交の禁の布かれし際。之を除けりと。故に今空堂となれり。此他境内に記すべきの事なし。因て左に一二の碑文を掲げて讀者に紹介せむ。

○最上算子塚

世中は何れの道もそろはんのかけはしわたる士農工商

文政三庚辰歲冬 山谷新鳥越 中原耕張

○伊藤聽秋の墓

表に聽秋居士埋骨處とありて。裏に左の文あり。

伊藤分一之墓

文政五年六月二十日。生於淡州津名郡洲本町。明治廿八年四月一日。没于東京向島。壽七十四。

○植村蘆洲の墓

山東野老埋骨之處と題す。大沼枕山の筆する所なり。

○題群盲評古圖

凡人經目而見之者。其物色也。觸耳而聞之者。其天籟也。宰斯二者。其心官也。雖斯三物不可除一者也。唯心爲大焉。用耳目力則淺薄矣。用心力則高遠矣。是故離婁雖明。不過於百步外見秋毫之末。師曠雖聰。不過於以六律正五音。以心力則天之高也。星辰



蓮華寺より官府へ録上したる取調書あり。今之を抄略して其要目のみを左に擧ぐ。

山城國京都東山智積院末

眞言宗 蓮華寺

創立鎌倉北條家四代經時子息頼助開山弘安三年八月二日移當  
地寺格香衣淺青二色着用

- 一 舊朱印高心石 寺島村之内
- 一 檀家 百三十戸
- 一 境内但官有地 五反一畝十六步
- 一本堂 建坪二十五坪七合五夕
- 一地藏堂 建坪五坪
- 一立木 十一本
- 一 弘法大師畫像 一幅
- 一 每年三月二十一日開帳

蓮華寺の縁起

蓮華寺は、昔は現今の地より東四町許りを隔てたる處にあり。故に今尙其地を字して御影堂といへり。然れども現今の地に移轉せし年代は、今之を知るへからずといふ。本寺に傳ふる所の縁起は左の如し。

寛元四年丙午五月、北條經時病に罹り、卒するに臨んで、其弟時頼を病牀に延き之に遺命して曰く、吾死するの後は、必ず吾が持念佛を本尊として、一字の梵刹を建立すべしと。既にして經時卒し、時頼命を奉じて、鎌倉佐々目ヶ谷に巨利を創建し、名けて蓮華寺と云ひ、眞辨法印審範を以て之が開祖となし、聖徳太子の御像を安置せり。其後幾何ならずして、京都禁裏の内道場に莊嚴し奉る所の女人濟度尼除弘法大師を奉して、蓮華寺に請待したりしが、恰も當時武門專横の時な

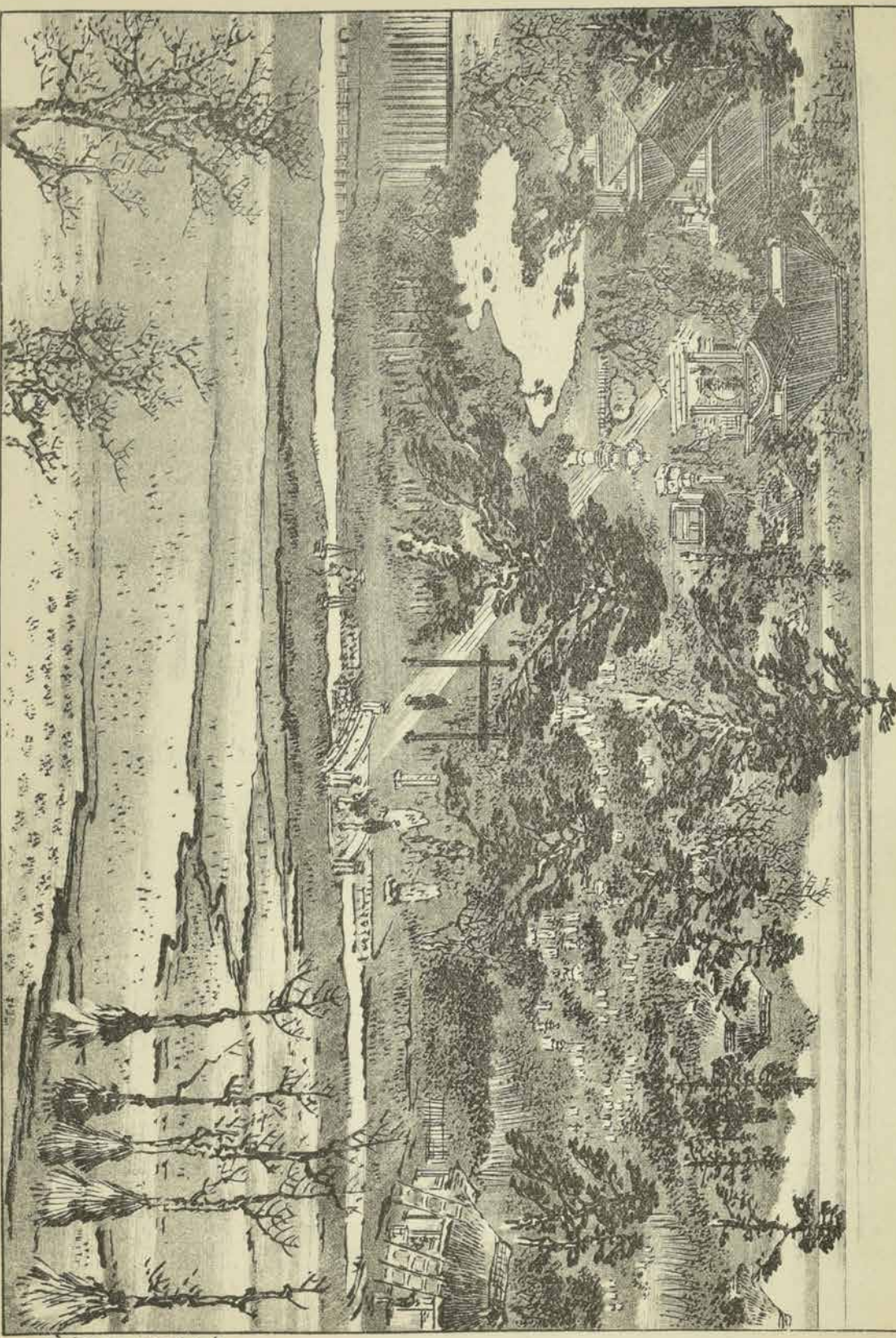
之遠也。苟求其故。千歲之日至。可坐而致也。苟將欲盛事不朽者固非聰明睿智而達天德者不能焉。今群盲評古。雖未審厥所論。如以大智評至道。莫向焉如以聲音。寧將可乎。如以物形。殆將不可乎。如何。昔者鏡面王令引群盲摸象。王問之曰。汝曹見乎。對曰。我曹俱見。王曰。象何類乎。持足者對曰。明王象如漆桶。持尾者。象如帚掃。持尾本者。言如杖。持腹者。言如鼓。持脇者。言壁。持背者。言如高坑。持耳者。言如篋箕。持頭者。言如魁。持牙者。言如角。持鼻者。言如太索。復於王前共訟言。大王象真如我言。時王大笑之曰。譬哉々々。汝猶不見。便作偈言。今爲無眼會空淨。自謂諦觀。一云餘非坐一象相怨矣。蓋佛典以性爲大道也。故以全象比焉。斯謂群盲者。非曰真盲者也。指一切衆生。不能見性者曰。羣盲者也。然而據此則不見性者。迺皆盲也。見性者。迺皆明眼也。不能小德小智。輕心慢心。而入道者。惟以眸子瞭稱明眼者。猶淺識蒙昧黔首也。唯其肉眼照映而已。縱令其喪肉眼見性者。高識明朗賢哲也。此黃面老之玄理也。非翹黃面老。又夫子不云乎。人而不爲周南召南。其猶正牆面而立也與。其至理融通不迂回。概如此。與群盲等。自徒諍訟於王前。不若還而各研精廣神。玄默而後能須要識得性也。識得性則明眼也。王豈可復輕侮之乎。固欲玉女也。抑周道衰。而百家蜂起。衆訟六經。未知評論所適歸。若聖者興。輒道已。如何文武之政。布在方策也。若夫群盲之評。不見性。則以彼盲等於此盲。過差豈遠哉。

于時天保五年龍集甲午春三月環中齋高獨步撰并書

門人勢陽山中拔山建石

此他本堂の側老松樹の下に。かつま八郎兵衛の墓といふものありしが。固より好事者の僞り設けしものなれば。數年前之を毀ちたりと云ふ。

蓮華寺の取調書





りしを以て。其奉送を怠り。在母之を蓮華寺に安置せり。抑も女人濟度厄除弘法大師は。空海祖師の御自筆にして。往昔祖師京都東寺に御安座の時。勅命を奉じて女人濟度厄除弘法大師の御影を筆し奉り。皇后宮即ち之を内道場に莊嚴し。且暮に女人厄除を祈禱せし所の大師なり。然り而して經時の死後其子賴助性多病にして執權職を襲く能はず。是を以て叔父時頼に其職を譲り自ら剃髮して。諸國を徧歴し。偶々武藏國に至り。今の所謂寺島に來り。從者と共に一寺を建立し。鎌倉佐々目ヶ谷の蓮華寺を遷し。女人濟度厄除弘法大師を安置して本尊となし。右側に小舎を營して聖德太子の御像を納め佐々目大僧正賴助と號し。自ら開山たり。是れ即ち今の青瀧山蓮華寺にして。此地たる其昔未だ曾て茫々たる青海原なりし也。當時漸く干潟となり。初めて此に當寺を設立したるを以て。寺島の稱起れりと。其由緒實に斯の如し。

### 蓮華寺創立の異説

蓮華寺の縁起は。寺傳に據りて前項に擧げられたるも。諸書の記する所に稍異同あるか如し。今此に江戸名所圖會及び新編武藏風土記の二書の説を讀者に紹介す。但し其是非は今遽に之を判すべからず。

江戸名所圖會に云。本尊聖德太子の像は。十六歳の眞影にして。太子自彫造ありしと云。北條經時の念持佛にて。往古は相州鎌倉佐々目谷にありしを。弘安三年の秋。北條賴助寺院ならひに本尊共に此地へ引移し。同年八月二日。入佛供養を營し故。今に至る迄。此日を以て縁日とす。又是より先寛元二年の夏。國中大に疫疾流行し。人民死する者少からず。經時類に是を歎き本尊に告て諸人の病を消除せんとして。懇に祈願す。或夜本尊經時に靈示ありて秘符を賜ふ。即此秘符により

て。其頃病を退け。命を全ふする者すくなからずとなり。

相傳ふ。寛元四年丙午三月下旬。北條經時疾に臨む。其時舍弟時頼を側へ招き示して云く。我疾難治なり。死後に至らば。一字の梵刹を創建し。年頃念る處の聖德太子の像を安置すべしといひ終て。同四月朔日。享年三十八歳にして逝去あり。經時に云寛元四年丙午閏四月一日今日入道正五位下行武藏守依時賴遺命を奉し平朝臣經時卒す法名は安樂年三十三とあり證すべし。經時が蓮華寺を奉じて鎌倉佐々目ヶ谷に一字を闢き蓮華寺と號し。經時の法號を蓮華寺殿前即辦法印審範を以て開山とす。寺記に審範は賴助の外伯父孫定門の曾孫なりと詳なり。又其後經時の子賴助此寺島を領せしか出離の志頻にして忽に剃髮し。弘安三年の秋。鎌倉の蓮華寺をこの寺島に移し。自開山たり。佐々目大僧正賴助と號せり。按に先に審範を開山とす至りては賴助開山たりしなるべし。諸家系圖に經時の子に賴助といふ號を載て傍に佐々目大僧正注せり。疑ふらくは佐々目といふべきを誤れるなるべし。また賴助は賴助の字をいふならん。元享三年。北條家滅亡の後も。猶尊氏將軍及び管領基氏等崇敬厚く田園等を附し御教書を賜ふ。其後文明の頃。下總の千葉兩家と別れし時。互に爭戰止時なく。兵火の災屢にして。當寺も大に荒廢せり。然に天文年間。小田原北條家の領地となりし頃遠山丹波守奉行として。寺領等を寄附せり。天正の後。四海泰平に治りしより更て寺産を下し賜ふといへり。

按に鎌倉光明寺の開山記主禪師傳に云く。寛元元年五月三日前武州太守平經時鎌倉の佐介谷にをひて淨刹を建立し。蓮華寺と號け。良忠を導師として供養を演らる。後に經時靈夢に感する所ありて光明寺とあらたむると云々。又鎌倉大日記に云く。建長三年。經時の爲に佐介にをひて蓮華寺建立。住持良忠とあり。されど寛元に建立せし蓮華寺は。經時の生前なり。又建長に建立ありし蓮華寺は。經時の没後にして。其間七年を隔たり。依て考ふるに其號によると

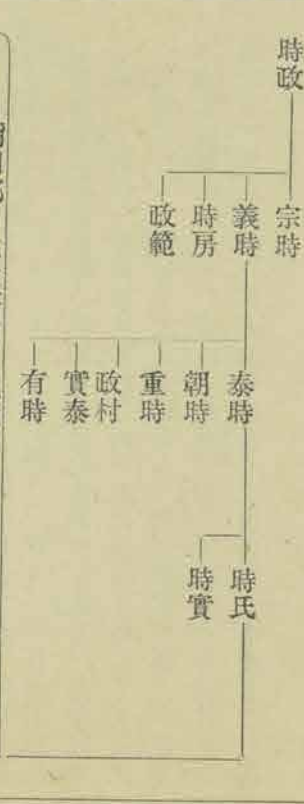


きは。一寺の如くなれども自ら別なるべし。然る時は鎌倉  
 光明寺の開山傳に載て。寛元元年。經時生前に建立すどあ  
 るものは。後に光明寺とあらため。鎌倉の内の材木座へう  
 つしたる是なり。又鎌倉大日記にはゆる經時卒去の後。  
 菩提の爲に建立とあるものは。則當寺の權輿なるべし。  
 新編武藏風土記に云。縁起云。當寺は。最明寺平時頼の舍兄  
 武藏守經時朝臣の菩提寺なり。初は相州鎌倉郡佐介谷に創立  
 ありて。其經時寛元四年。逝去の後。時頼一寺を建立して。  
 蓮華寺殿前武州安樂大禪定門と諡す。時の開山は。辨法印審  
 範なり。審範は則朝頼卿の外伯父深井法眼範智の孫なり。其  
 後經時の子佐々目大僧正頼助。此寺島を知行ありし時。鎌倉  
 の蓮華寺を此所に移し。弘安三年八月建立して。頼助自から  
 中興の開山となれり云々。按に此寺傳疑ふへし。いかにと云  
 に。鎌倉大日記に。建長三年。經時か爲に佐介に於て蓮華寺  
 建立。住持は良忠と記し。又鎌倉志に。佐介谷の蓮華寺は。  
 寛元元年五月三日。平時頼の建立にて。時の導師は記主禪師  
 とあり。此二書に載る處年代等は異同あれど。導師は共に記  
 主なれば宗門元より淨家にして審範にあらざること明けし。  
 しかのみならず。鎌倉志には。蓮華寺創立の後。經時靈夢あ  
 りて。光明寺と改む由を記し。今光明寺にても。しか傳ふれ  
 は。當寺の傳記正しとはおもはれず。もしくは當所頼助か頼  
 知なれば。遙拜の爲。別に同名の寺を起立ありしを。たま  
 く佐介谷の蓮華寺改號せる故。後人妄に彼寺を引き來りし  
 など云てせしにあらすや

蓮華寺の開山

蓮華寺の開山は。北條經時の子頼助なりと云ふ。按るに頼助と  
 いふ者史上に見る所なし。墨水遊覽志には。頼助を以て經時と

爲す。曰く。開山北條最明寺時頼の兄經時。入道して佐々目大  
 僧正頼助といふ。弘安三年八月。鎌倉より寺島へうつると。是  
 れ何の據る所ありて記せるにや。史を按ずるに。經時は。寛元  
 元年に卒したれば。弘安三年とは。其間を距ること三十七年な  
 り。三十七年の卒後。移りて寺島に住す。是れ甚た怪むべきの  
 至りならずや。然れども頼助の如何なる人なるやは。今述に之  
 を考ふべからず。因て姑く北條氏の畧系を左に掲げて。讀者の  
 參考に供す。



諸家系圖には。經時の下に頼助といへるを加ふ。然れども頼  
 助といへるはなし。故に江戸名所圖會には。頼助は頼助のこ  
 とをいふならんかといへり。尙他日再考すへし。

百花園

白雲神社の森より長堤を離れて、横一丁餘東に在り。寺島村(千  
 百五十六番地)に屬し、園主を佐原平兵衛と云。周圍に溝堀を  
 繞らし要冬青籬を結び、三千餘坪の園内山野の自然をうつし、春  
 花秋冬の花弁花木、花一日に一花ひらかさるはなし。  
 此園は文化元年の春、隠士菊塙が開きしなり。菊塙又鞠塙とも、

俗稱を平八といふ。奥州仙臺の人なり。天明年間江戸に來りて、  
 十年許の間に蓄財し、住吉町に骨董店を開き、北野屋平兵衛  
 と稱す、世人故に北平と呼べり。元來世才ありて文事にも疎か  
 らず、當時の文人加藤千蔭、村田春海、龜田鵬齋、太田南畝、大  
 窪詩佛、抱一上人など諸名家の愛顧を受け、特に川上不自、千  
 柳菊旦の紹介にて、諸侯旗下の邸へも出入し、家益富めり。後  
 ち本所中之郷の片邊に潛み、菊屋宇兵衛と變名す。ざるを以て  
 又菊宇と呼ひしか、剃髮の後、鵬齋より歸空と稱せば、入道隱  
 者にふさはしからん、と云ひしを歸空は文字いまはしどて、菊塙  
 の字に換へしといへり。さてかく閑居しては、世渡る業もなけ  
 れは、最初は耕圃の業を興さんと志し、幸に葛西領寺島村に、武  
 家抱屋舖の沽却地三千坪程を購ひ求め、自ら鋤を負ひ苟且に籬  
 を結び、花園をなせり。此地は豪民多賀氏の住居なりしなり、  
 里俗は多賀屋敷と呼べり。かくて園中に營神の小祠を建て、諸  
 文人に各梅樹一本つゝの寄附を乞ひしに、千蔭春海南畝鵬齋詩  
 佛五山佛庵抱一文晁自寛平荷寛光大梅躬弦不自岡持眞顔雅望菅  
 江橋洲等を始め、當時有名の文人墨客何れも一本或は二本を栽  
 ゑたれば、忽三百六十餘樹となる、一株一日の料にあつ。この  
 菊塙は風流より、寧ろ利に敏き性質なるを知る。又秋草も宮城  
 野萩筑波萩を初めとし、諸國名所の種を移して、道の筋も自ら  
 なる野路の體にし、萩薄桔梗尾花、しどろもどろに打亂れたる  
 さま、彼の文人墨客の物すきには、麗しく作り立てたる花園よ  
 り、一入雅致ありとて、風流めかして花見人ど來る人、入かは  
 り立かはらりと繁昌せり(菊塙の傳は松屋叢考、神代餘波、野  
 邊白露、名人忌辰録並びに先年國民之友にも見へたり)其の初  
 め菊塙が園を此地に開くや、詩佛鵬齋菊山眞顔千蔭春海の徒、  
 日々此園に訪はれて詰めかけて。彼の樹は此所に植えて、此の

草は彼所に移してよ。否夫れでは却て後來の爲めになるまじ、徑  
 路は池水はど其度毎に心にもあらぬ争論ひもしつ、其位置を定  
 むるだに月を閲し我物顔に庭造りしつ。偕て園内幾曲の繩張も、  
 菊塙は四ツ目垣が柴垣を結びて、豫め心なの雜客が蹂躪に備へ  
 まく欲りせしも。かく嚴めしき垣は不要なるべし、竹を伐て一  
 間毎に樹て、之に藁繩を纏ひたらんには、風流にして有興からめ  
 ど、切て藁繩か棕繩をと言出でしも、其甲斐なくて藁繩を纏  
 らしぬ、今に於て然り。凡て庭園の風致、當時聞人輩が定むる所  
 に準して、毫も改むる所なきは好すべきなり。而く聞人が日毎  
 の遊び所となり、蜀山が園内に「花屋敷」の三字を題すれば、詩  
 佛が左右の柱に「春花秋冬花不斷、東西南北客爭來」の聯を掛  
 け。千蔭が「御茶きこしめせ梅千もさむらふぞ」の掛行燈を掲  
 ぐれば、またも天民は負けじとや「墨田川の土を以て製したる  
 都鳥の香合及杯類品々」の看板に指を染めて、菊塙の園は其名  
 の遠近に傳へられぬ。  
 此梅園を開きし翌年正月、園中に小松を植ゑなめて、子の日の  
 宴を催したる折、文人集りて集ひ寄せたる、其歌に、  
 松も引若菜も摘みて今日よりは  
 春のこゝろを覺え初めけり 千 蔭  
 梅咲かばつぎてもとはん此宿の  
 松にひかる、今日はかりかは 春 海  
 鶯の 初音の小松引袖に  
 あるじ顔にも匂ふ梅が香 自 寛  
 此大人達のみならず、此庭に群集ひし人多かれど、煩しけれ  
 ば洩らしぬ。  
 如月十四日花盛りなり  
 やさかつむ越路の雪の薫りなば



かくころあらぬ梅の花園 千 蔭

早月中三日花屋舖を尋ねて  
みなさかかん春をぞ契る五月雨の  
雨の名に負ふ梅の下陰

春 海

葉月の初旬花屋舖にまかりて  
人心迷ふ秋野を怨るに

不 白

生ひまつはるゝ宿の葛はな 田 鶴 子  
文化のはじめ、川上蓮華菴某來和尚と池田の君と、天  
神堂に招請し、茶を點しすゝめければ。

あらためて開くや梅の花屋舖  
此日花の眞盛りにて和尚曰、樂中苦、苦中樂とはなし  
に句ひも深かりしに、入相の鐘に、にしきをたちて歸  
りぬと書殘されし一句花屋舖の什器となりぬ。

丙戌のとし卯月七日友とちこに誘れ、すみだ川に遊び  
菊塙の需めに、いなみがたく筆とりぬ。

萬松山下云々子

花は如何に風にそよめく若葉さへ  
飽かぬ咏めの隅田川原ぞ

あつまにも心の澄めばすみだ川  
都の鳥の名をもしたはず

云々子は紫野大徳寺、孤峰菴和尚なり、萬松山は、品  
川東海寺の山號なり。

菊塙の花盛りにまかりて  
王仁吉師かもて來し梅の花なれば

蜀 山 人

世上の春やひと呑みにせん

菊塙は天保二年八月歿し、享年七十歳其辭世に  
隅田川梅のもとにて我死は

菊 塙

春咲く花の肥料ともなれ  
其遺志や坐るに追想するに足る、菊塙は花陰の肥料となりぬ。

當代平兵衛氏は其四代目なり、又此園に於て、昔より摺物にせ  
る花の菜に。

正月は(初子日)小松引宴(人日藥物七くさ) 佛の座す、なす、しる  
くさ七

二月は(啓蟄)此日梅花盛なり百株(清明)ちやまふき  
三月は(穀雨)櫻花○梨花盛なり(八十八夜)牡丹花百品

四月は(小滿)芍薬百品(夏至)棟せんたん○卵の花  
五月は花かつみ○花菖蒲(小暑)合観花むのはな

六月は(大暑)あさかほ花盛なり○蓮○三稜  
七月は(白露)みやきの、萩○つくは萩○もどあしの木萩菴類入  
品(花扇七種)蓮、桔梗、小車、女郎花、菊、島薄、煎翁(以上七種  
八月は(秋分)すずきのすき、まさをの葉、ますうのすき、かるかや、われかち、總て秋  
り(秋の七草)芽子之花、尾花、葛花、瞿麥の花、女郎花、又藤  
袴、朝顔の花。

九月は(霜降)きくの花盛。大きく百品。中菊百五十品  
十月は(立冬)紅葉類 楓、榊、杜仲、漆、柞、銀杏、狐援。

右の外詩經草木萬葉集草木惣て園中の草木七百二十種  
とあり、されば小植物園の觀ありしなるべし。當時とても西洋  
草花こそ植えね、珍草異卉目を喜ばしむるに足る。寺門靜軒が  
江戸繁昌記に、新梅園と題し、當時の景況を、例の縦横の筆に  
叙したれば、左に掲ぐべし

新梅園

園在墨水東隣(白鬘祠)幅員萬畝地形如環(環籬籬屏)内水繞  
其外土橋甚容柴門殊卑入則豁然景寬自覺(趣別)又過(一門)漸  
入(佳境)南面皆植(梅)榭(榭)林立(橫)斜交(枝)據(西)起(樓)榭(亭)建(

榭連接延(北)深(以)待(遊)客(迫)東(引)水(水)之(遠)近(詩)七(秋)草(一)聞  
七(秋)草(目)出(萬)葉(集) 萩(芒)葛(蘭)瞿(麥)敗(醬)牽(牛)花(凡)七(種)或(以)桔(梗)  
爲(牽)牛) 水(心)種(蓮)水(涯)種(花)菖(蒲) (漢)名(未)聞(東)交(南)雜(木)  
扶(疎)衆(草)蔓(蕪)一(年)四(時)莫(半)日(不)花(開)而(園)主(以)梅(爲)第(一)  
生(計)媒(花)賣(茶)養(子)爲(諸)乃(梅)之(發)遊(人)最(多)戀(香)慕(影)清  
賞(閑)吟(至)晚(而)去(比)其(飄)零(適)遇(墨)水(櫻)園(園)雖(綠)香(客)馬  
波(及)水(上)春(流)園(放)杜(丹)姚(黃)魏(紫)富(貴)選(相)然(富)貴(難)保(異)  
乎(梅)苦(操)一(算)日(而)衰(子)是(乎)人(迹)稍(罕)四(面)綠(昏)梅(子)始(青)幽(禽)  
占(陰)各(鳴)得(意)所(謂)遊(人)去(而)禽(鳥)樂(也)清(幽)間(鶯)微(泣)紅(猶)携  
餘(香)石(榴)夜(合)幽(花)續(綻)紫(菖)蒲(墜)白(蓮)花(開)水(清)香(潤)金(氣)遂  
冷(秋)草(吐)紅(錦)織(於)雨(繡)卷(於)風(秋)猶(如)春(遊)人(復)盛(中)聲(悽)  
咽(露)光(輝)妍(使)人(目)爽(心)淨(凌)霄(翻)雲(桂)香(薰)月(蟬)吟(欲)嘆(而)  
菊(正)芳(所)謂(隱)逸(香)色(堪)久(不)如(杜)丹(易)凋(也)菊(枯)天(寒)霜(飛)  
樹(紅)拒(霜)茶(梅)補(粧)於(梅)未(開)問(前)主(菊)塙(嘗)言(新)關(迄)今(幾)餘  
廿(年)花(木)之(富)繁(昌)至(斯)今(園)主(平)々(庵)善(繼)樹(業)不(隕)花(聲)  
井(木)歲(繁)客(馬)日(昌)予(謂)江(戶)繁(昌)亦(可)以(候)焉

天保十四年九月二日 御勅使徳大寺日野兩卿隅田川の邊り遊  
覽あらせられ當園に立寄らせ秋の草々を御覽して。

落とに幾世かさねむ百草の 徳大寺大納言實堅卿  
盛ひさしき長月の秋

心ある誰かいつの世に植初て 日野前大納言資愛卿  
咲や籬の秋のいろくさ

文政十二年三月十三日、徳川十一代將軍家齊公隅田川筋御遊  
覽の節、御立寄あらせられき。弘化二年正月十八日十二代將  
軍御成の際、墨田川樂燒御上覽の爲め、別に御成座敷前に東竈  
を築立て、燒上方御覽に入れ奉る。此の御遊覽は鶴御成とて、園  
主平兵衛特に之を築とし、後の世までも紀念として、鶏村が磯

に鶴を書き、近來榎本子爵が一羽の鶴を贈りたる、項を別に記  
さん。

百花園の異名 百花園、花屋舖、新梅屋敷、七草園、梅が屋、  
菊塙亭、春秋庵、都鳥菴、小孤山、梅花茶屋以上十種猶あるべし  
や、百花園及び花屋舖が通稱にして、新梅屋敷は龜井戸清香菴  
臥龍梅に對しての名なるべく、小孤山は林和靖の孤山に比して  
かくは命け、む。

橋堀 周圍に橋堀あり、此地舊多賀藤十郎陣屋跡として、今  
に其形勢を存す、幅一間程、秋は萩の花滴ばれて床かし。

入口 素木造の門あり、槇の枝延びて笠木に這ひ纏はれる、  
江戸繁昌記に、土橋甚容柴門殊卑とあるは、此門をいふなるべ  
し。

馬房 門内右傍に馬房あり。  
多賀靈神 左側に些かなる祠あり、多賀氏の靈を祀る。多賀  
氏は徳川家旗下の士にして、寺島請地澁江川端の四箇村を領し  
この梅莊の地は、其陣屋跡なれば、多賀屋敷と呼ぶなり。屋敷  
の外堀も、他に比ぶれば幅廣く、要害の様ありと云、この多賀  
家廢絶は、享保中の事か未知らず、かくてより此村の里正は、  
往々災害障の事に逢ひて、勤續する者少なりしか、近來高  
木氏(金右衛門)は村吏の職に在ること四十餘年に及べり、故に  
明治の初年に至り、小祠を園の一隅に建て、多賀氏の靈を祭  
るといふ。

園門 袖垣を結び、茅葺の梁門あり、扉は片方に開く、扁額  
あり「花屋敷」と題す、南畝の筆なり、舊幕時代には、平民の分  
際として、表向屋敷號を冒かすを免されず。(龜井戸の梅莊も梅  
屋敷とは云はず、臥龍梅と號しぬ)。蜀山人戯れに、花屋敷の敷  
の一字を草體に書き崩して、曖昧模糊の内に囁きたるなり。



左右柱の聯は、大窪詩佛題す。

春花秋冬花不斷 西南北客爭來文政丁亥臘月 詩佛老人書

當時掲げたるは、其模寫なり、現物は半ば蟲喰み、園主之を秘藏す。

茶店 園門を過ぎて飛石傳ひに行くべし。母屋は茅葺にして、四阿を設け、椽臺十數脚を出し、少婢數繫茶菓を侷め、また名物隅田川燒及び萩筆を鬻ぐ、掛行燈に、

御茶きこしめせ梅干もさむらふ

千蔭の筆なり、貼換へをなせば勿論寫しと知るべし。聯あり、

氷姿玉骨春描百美之圖 幽紫澹紅秋織萬珍之錦海居士

は百川翁の句にて、近年掲ぐる所なるも、

墨田川の土を以て製したる都鳥の香合及杯類品々

無落款の扁額は大窪詩佛の自筆なり。其他鷄村筆鶴の額、沈萍香が梅花園の横額、市河米庵が春秋菴を題せる、珍らしきもの

いと多かり。

梅河水 井戸あり、梅河水といふ、青苔封じて清冷いふべからず。

角田川燒 此すみた川燒は、角田川の土をもて、都鳥或は種々のものを製出し、世に角田川燒と云。從來器類は、皆山の土を用う。此角田川燒は、水の産なり。等しく山によるものを川によりて製出たるは、雅にも亦趣きあるべし。角田川床しく思ふ人々への家産、はた都に因のある、鳥の名の咄の種にもならむかし。

萩が花つま 園生の萩の枝を手折りて筆を製す。

其昔菊塲ぬしがものしおかれたる筆に、名をつけよとありければ、萩が花妻となつて、今の梅莊の主平々翁にかはりて、

花妻と名を負せたる此筆は

いのちけながき鹿にぞありける 堤 雨 敦 信

福祿壽 向島七福神の一なり、作未詳、室内に安置す。

燒窯 母屋に隣りて、間口三間半奥行二間の小屋あり、東竈を据え、陶器を製造す。

鶴 燒窯に隣りて柵を結び、鶴一羽を飼ふ、此鶴は明治二十一年榎本子の寄する所、朝鮮の鶴なり。

離座敷 北に離座敷あり、一棟を三室に區劃る。東表の一室は床を一段高く構造りなしたり、昔より貴人を招待する席なり

昔將軍御成の節は、此室にて上覽あり、今猶皇太子殿下を始め皇族方御來遊の折は、此茶室に請するなり。御製及皇后宮御

歌寫しの額面を掲げて、敬禮謹慎の意を表す、御成座敷といふ。

同棟にて西の一隅に芭蕉堂あり、伊祖芭蕉の像を置きしも、去秋賊の爲めに盜まる、俳句連歌の額面あり。

四阿家 離座敷に隣り、池に枕みて風雅なる四阿家あり、斑ある小笹のいたく生ひて池には蒲の穂先長し。

池水 三百坪もあるべし、文化年間其祖菊塲が開鑿する所、現在の儘なり、池心蓮を栽へ、又花菖蒲を培養す。

御成門 園の南端に臨みて、二箇所に門あり、共に御成門と呼ぶ、將軍御成の節は、此門より御通行あらせらるゝに因れるとぞ當時べ切にす。

梅樹 千餘株、就中八房、鶯宿梅、壽星梅、玉莖綠納梅、玉垣の梅、波花紅、鶴頂梅、内裡梅、兒紅梅、寒紅梅孰れも古木なり幹は莓苔を帯びて如月中旬、花は白玉を綴り、芬芳馥郁満園薫す。

壽星梅 田安侯命名する所とぞ、士人爲に帽を脱するあり、屢々嵐に吹き折れて現存するは、其孫木に當るとぞ。

茶圃 園内梅林の間に茶を培養す、種を將軍家より賜はるとぞ。

菊塲主人の心をこめられし新茶に銘を乞はれぬよりて晚樂と題し侍りぬ

丹精の茶を摘たての色も香も 翠 堂

おそらく恥ぬらうちもろだちも

毎歳新芽を摘みて、自製の茶を侷む。

老松 松の古木あり、中心朽ちて空になり、裡に白蛇住す注連を施し、神木に崇む。

菅祠 昔園内に菅廟ありしも、大破に及び暫く廢絶したり、近年再建するといふ、用材を悉く園内の梅樹に取る筈なりとか。

く、のちの神かやのひめの神二柱の碑 草木の神なり、園の東部に在り、以前馬房の前に埋もれて、五寸許頭部を露はし居たるを、數年前偶然に發見したり。草木の神なれば、今は當園

鎮守の神の如くなりぬ、何時の代に誰が建立しや、古き碑なるべし、奇縁と謂はむか。

園の石碑 園内碑文多し、鴨齋が墨沱梅莊記等見るべきものあり。

●墨沱梅莊記

墨沱之瀨。葛坡之傍。荒圃鋤而新圃成。植之梅一百株。毎歳自立春傳信之候。涉二月啓蟄之節。樹々着花。滿園如雪。望之則若白浪翻空。若蓬萊銀闕。在水底。而不可近也。若藍田美玉。簇々駢峙而生烟也。蘇東坡所謂花如海。蓋是類耶。輒笑袁豐張幕塞壟。又怪大度嶺植三十株而稱天下之奇焉。莊主曰鶴塲。風流瀟灑希有之士也。自初植梅。纔十年。遂爲都下第一奇觀之場。巨觴大噉。幽人韻士。好事之客。皆載酒遊于此。余亦來觀之者數矣。今茲之春。欲觀其開謝榮衰。而窮其始末終焉。於

是。雪之日。月之夜。雨之朝。風之夕。清明陰晦。旭曦晚照。皆來寓目於此。而花之喜怒夢覺。形態性情之變。靡不畢究其狀矣。一夕月下酌酒賞之。遂醉而寢。忽夢。一大姬自稱花嬈。率一百美女而來。縞袂一同。靚妝一齊。如帝釋王。從天女。降于毘耶城。余環視之。膚透如水。骨瑩如玉。韻格孤高。皆有仙風。實世外之佳人也。花嬈謂余曰。昔陸放翁愛海棠。自稱曰海棠嬈。今先生酷愛梅花。我命先生。曰梅花嬈。夫海棠棠矣。梅花清矣。頗於清。與嬈於艷。其頗雖同。其趣則異。於先生之頗。我見其清焉。乃使一美人。取觴而勸之。其味如仙漿。飲之。倏覺身香體輕也。枕頭有咳聲。俄然夢醒。回視無人。唯見莊主挑燈誦范氏氏譜而批之。乃謂余曰。先生無乃見鬼邪。何呻吟之長。余以夢中所見。語之。且謂曰。梅花嬈之名。莊主實當之。非吾凡骨所能任也。遂書其言而去。時文化十一年甲戌春二月十五日也。 鴨齋龜田興撰并書

●鳥の名の都となりぬ梅やしき 益 賀

●花を花とおもふ日春ぞくれにける 鶯 雪

●こにやくの斜しみる些しう馬の花 芭 蕉

●春もや、けしきと、のふ月と梅 是 せ

●夜 來 我 花

●大 慶 由 成 賀 文 賀

●天保七丙申年仲春

●山上臣憶良

●秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花

●芽之花乎葛花瞿麥之花妬部志又藤袴朝靨之花

●天保七丙申年仲春

●秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花

●芽之花乎葛花瞿麥之花妬部志又藤袴朝靨之花



此乃董堂先生絕筆也。今茲辛巳四月。先生始嬰疾。至七月。竟不起。蓋自嬰疾已來。先生知其不可起。予輩亦竊慕其無起色。一日秋雨輒至。微涼可入。先生快然而起。呼筆硯。書臣憶良所詠秋七艸和歌二首。筆力勁健。殆非病中之作。且自謂曰。春秋之際。墨水探花尋楓者有年。今也臥床。徒想思耳。聊書此。以舒感懷之慨。且以慰早情。死後勒石。樹之秋芳園中。得與花結未了緣。亦身後之幸也。於是門人相議。急入之石。打摺成幅。而請正先生。時先生病加枕重。但開目欣然一視而已。嗚呼悲哉。其慷慨酬志之態。宛然在眼。而其人已千古矣。門人如予輩者。寧不對之墮淚如襄陽乎。文政四年猛秋下泮

橫井忠德撰并書

●詩佛畫竹碑 大津詩佛畫竹 鈴木雲潭作石 (舊卷)

先生畫竹似化工。經營不假艱煉功。畫竹法自來書法。印泥墨沙法旁通。偏寫神韻不寫態。唐史俗工何得同。援筆展紙疾呼前。三杯方作一兩葉。一叢二杯與畫動。醉來墨幻奇無窮。湘水飄雨暮漢々。渭水夜月香靡々。先生氣局誰能測。汪々萬頃今坡公。一須更貌清瘦骨。精神只在一幅中。

淡齋佐羽芳題

詩佛老人碑竹記 刻在碑陰

竹之爲物。非草非木。無常花。無常實。不風雨撓。不霜雪凋。直節挺然。獨立風塵表。此乃隱士操也。故君子常比德焉。詩佛老人。超逸灑落。介然絕俗。名佛而實儒。隱市井。而遊書畫。其初好畫梅。自號瘦梅居士。既而曰。花清而香遠。又且有和羹之實。此非吾輩所可得比也。改而畫竹。且謂曰。以佛爲名。而有圓通之相。以儒爲實。而有苦節之操。固其宜也。於是遂專畫竹。畫竹必題詩。詩必自書。書之類健。詩之高淡。畫之飄逸。併可以知其爲人矣。若以竹而已矣。則直節虛心。無花無實。得風而笑。經霜雪而增色。自是詩佛面目也。故淡

齋詩曰。不須更貌清癯骨。精神只在一幅中。然則詩佛畫竹。即詩佛一箇肖像也。是其所以碑而傳之歟。壬午竹醉日。

朝川鼎撰 卷大任書

●金盤銀燭醉爲鄉。高館春深賞海棠。誰信野郵水雪際。梅花却是弄孤芳。林下僂姝清淨身。粲然微笑十分春。世間無復逃禪筆。自有嫦娥爲寫真。清標高格百花冠。枯健猶能守歲寒。和月帶風。看不足。吟來更向句中看。

此宮澤雲山先生看梅詩也。余愛其清逸有致。因書上石。

文政丁亥孟春 鶴嶼守郵約記 廣群鶴 鶴同鶴 美 知 彦

世の中に梅のさきけりすみた川 七十四翁 一桑庵野月建之 窪世詳編

文政十三年庚寅九月日 補助社中 二木 幸雄 玉山 杜英

水や空あかりもちあふ夜の月 北元 居士 惟草書

天保庚戌年 旭愨建

●し の 六 つ か 二世 河竹新七記

隅田川よ二面よど歌舞伎にも淨瑠璃にも世にもてはやさるゝ葱賣は安永四とせ中村座の春狂言に初代中村仲藏が務め前の河竹新七の作なりそが正本を或人より贈られて久しう秘藏せしは名を嗣く者の幸と悦ひしが此度こゝに埋みて昔しのかの墳と名つけその故よし記しつくるは隅田川の流れ絶えず傳て二面の二つなき功蹟を後の世に遺さんどてのわさになんありける

明治十三年六月 雪中庵梅年 男宜來書



百花園圖





破陰

震柳居春荷 野月庵巨石 竹立庵言江 雪堂夢島靜  
北六軒蓮州 琴日庵逸風 翠湧亭雪蕉 竹林舍尚古  
雪堂圃吟 金生堂柳子 蓬萊庵時海 木谷庵巖俗  
默石庵猶蟻 仁住庵子白 雪裏人宜來 老堂藥作志  
明治十八年仲秋建石

● 芦の芽や田へ来る水も隅田川

螺舍 秀民 寶 晋 齋 書

螺舍秀民者。四世大黒屋庄六。本姓片岡氏。江戸芳原人。生於文政五年。秀民好酒及佳刀。以任俠自負。又好讀書。兼善俳諧點茶。而茶儀則傳不昧宗納法。俳句則奉晋子體格。入其角堂門。後襲晋子別號螺舍。家素富。風流瀟灑。所藏古器物。皆希珍也云。以明治丁丑十二月廿一日。享年五十有六歿。葬于山谷廣徳寺。三世螺舍孝節。玆建小碑。以表欽慕之意。

市川三兼書

破陰

田へ引たあとの流や芦の花

三世螺舍孝節

● うつくしきものは月日を年の花

寶屋 月彦

破陰

明治二十四年七月建之

寶屋 月彦

茶凭塚

かりたらん草の錦や花やしき

黙 翁

木石庵植黙翁大人一周忌辰門弟等繼志遺建之

明治壬辰九月

如電居士大樹修書

破陰

幹事施主其他數十名の姓名を刻す

鷗流狂言師

● 矢田蕙哉翁之碑

晋 永機 書

花くれぬ我も歸りを急かうずる

破陰

空也 門中 滑川正三郎 伊藤泰三郎  
藤間勘右衛門 服部彦七 鍋木進一  
菊川錦蝶 下田好升 市川猿藏  
宇治紫文 白木惣哉 市川染五郎  
宇治俊文 岡田龍吟 市川新藏  
宇治紫登 江東中村櫻 市川團十郎  
菅野まゝん 市川團十郎 未江 梅逸  
關岡長左衛門 關岡三翁 矢田 太き

明治廿六癸巳七月建之

● きやうげん塚

七十六叟 富堂 遠書

二世河竹新七。俳名は其水。晩に古河黙阿彌と改む壯年よを演劇作者となり古稀の齡を踰えて。明治二十五年の春。喜の字の祝さへ。爲しけるに。明るとし料らすも。病の爲に身まかりぬ。其一生の間に。書綴りたる新作の狂言。凡三百餘種有て。古來の作者に。珍敷事なれば。其名を續ける門人等。師の女とはかり。是を後に傳てんと。石をたて、狂言塚と名け。初代の名殘の葱塚に。なすらへて。しのふの文字を書附ることしかり。

明治二十七年十一月

女 吉村いと子 松仙芝 合刻  
三世 河竹新七 井龜鶴  
門人 竹柴其水

● 互住連

晴れくど産聲あけて梅の花

極魚

のあみしてすゝみ男と成にけり

水牛

名月やいつもの儘の人の影

喜好



つらなりて共に明るや雪の山  
手をうてははいと答つ水の音

篆額獲一書

市山  
三花

碑陰

明治三十丁酉年菊月建之  
春は梅の香を茶にとふして参らせ、夏は牡丹芍薬の色を茶の水  
へ寫し、時鳥の雨水を取茶を煎し呼子鳥の聲に稀人をもてなし、  
秋は朝露の露を百花にかもして、そかきくの匂ひ迄來客を待た  
よりとし、冬は紅葉のもとに尾花かるるや併に燻をへてうつり  
こし春秋の名残を思ふ風流韻士よ、半日の閑あらば菊場の園を  
訪へかし。

### ●小松島

白鬚神社より北西に方り堤外に在り、橋場の渡し場に接す。元  
此邊は川風寒く稻葉戦く水田なりしを、明治十一年田を埋め池  
を鑿ち庭園を築造し、翌十二年落成す、小野義貞氏の別墅なり。  
芝塘を繞らし紅白の桃樹を栽ゑ、又松櫻其外種々の草木を移す  
園内廣く優遊自適すへし、其假山に登れば遠く關東八洲を見晴  
して景色佳なり、故に八洲園と稱す。昔此地を八島の郷と呼べ  
ば旁々八洲の名を冒せしものならんか。其後奥州松島の景に倣  
ふて改築し、因て小松島と改む。明治十七年已來公衆の遊覽を  
許して、春は花見客の訪れていと賑ひしも、明治三十年十一月  
より縦覽を謝絶したり。

### ●木母寺

木母寺は、隅田隄北盡の處に在り、最も著名の古刹にして、人  
の之を知らざるものなし。明治の初一旦廢絶せしが、其の後再興  
し、今は香火の人甚た多し境内梅若家あり、詩人稱して梅兒家若  
くは王孫墓といふ。是れ當寺の由來する所なり。家上茅屋の小

祠を鎮す。白梅緑松等左右之を擁し。一株の垂柳其の中に挺立  
す。世に印しの柳と稱する者はなり。枕山先生の嘗て隅田隄上  
落花塵。木母寺中香火人、唯爲王孫留古墓。一株垂柳亦千春。  
と賦せられしは之か爲なり今存する所のものは舊株にあらず近  
年植しものなりといふ。

### ●木母寺の由來

新編武藏風土記稿に云。木母寺。天台宗。東叡山末。梅柳山隅  
田院と號す。寺額二十五石、内五石は慶長六年御寄附。二十石は  
寛文十年八月増賜はりし由。御朱印文にみゑたり。寺記曰。當  
寺は圓融院の御宇貞元元年の開基にして、始は梅若山梅若寺と  
號せり。建久元年右大將賴朝奥州發向の時、當寺に祈誓あり。  
其奇特ありしとて、凱陣の後再興す。按に此事未だ他に所見  
なし。梅若家の古きことは、世に著見なれば、寺傳と附會せし  
なるべし。殊に貞元元年は梅若丸卒せし年なり。直に寺起立の  
年とするも妄説なり。猶下條山王の社傳合せ考べし。遙の後長  
祿三年。太田備中守持資入道灌漑修造し。天正十八年東照宮奥  
州御發向の時、當寺に立寄せ給ひ。御歸陣の後再び成らせ給ひ  
し時。山號を梅柳と改しめ給ひ。其後慶長十二年近衛三猿院殿  
（信基後信尋と改め再び信尹と改めらる）立寄て。寺號を木母寺  
と改自筆の額字を與へしとて。今も寺寶とす。  
同寺主より寄稿せられたる由緒は左の如し。

東京府武藏國南葛飾郡隅田村大字隅田千五百四拾四番地

天台宗比叡山延曆寺末

梅柳山木母寺

一本尊

慈惠大師畫像 阿闍梨公眞筆 聖德太子畫師の贊大師一見し  
相殿 梅若權現木像

一由緒

創立貞元元年。梅若寺と號す。其後慶長十二年近衛關白信尹公  
東下の際、當寺に休憩して、梅の字を分て木母寺との三字を書  
す。因て以降木母寺と改稱す。慶安年中寺産朱章貳拾五石を德  
川家より寄附せらる。寛文の初。徳川幕府當寺に參詣し。後一  
字を建立す貞元元年より明治の際に至る迄。凡九百餘年。念佛  
三昧にて成しも。明治元年十二月。神式願濟。因て木母寺は二  
時廢絶せり。明治廿一年十月。往古當寺の未寺なる緣故を以て  
東京市深川大泉寺木母寺の名稱を繼ぎ。舊念佛堂敷地を購求し  
明治廿二年八月九日。府廳を經内務省の許可を得て。堂宇を改  
築建立し。神式を廢して。佛式に復舊せり。

以上掲げし如く。木母寺を再建せしは大泉寺なれば同寺の改稱  
に至るまでの顛末を叙せざるべからず。因て又同寺より寄せら  
れたる者を記載す。

當寺往古南葛飾郡泡の須村大泉寺と稱し。隅田川木母寺末寺に  
て。中興開山大僧正玄照。最初山門無動寺谷明德院住職の節。  
秘密苦修し。寶永正徳の頃。修力拔群の沙汰世上に聞え日光  
御門主大明法王の宮より。關東へ下向すべきの命により。東叡  
山本坊に滯留中。徳川將軍綱吉公本坊へ入來。談話の後加持所  
望の旨。御門主の宮より之を命せらる乃ち其法を執行し。後  
後西院天皇の皇女光照宮。御病惱の節。大明法王宮の命を受け  
上京。早速平穩有之。靈元天皇御感の餘り。橘の枝を折り。  
其外御節會の種々を下賜り。大明法王宮より。後陽成院天皇の  
御眞翰。其外種々下賜る。延享四丁卯年。前書泡の須村大泉寺

を。神田明神脇明空地八百坪餘の處に移轉し祈禱道場を建立。  
法輪山大泉寺意成院と號し。寶曆三癸酉年九月十九日。寺額貳  
百石を賜り。紫衣着用免許。安永二癸巳年。湯島より深川猿江  
へ移轉。湯島寺地跡は祈禱道場となし。之を受領す寛政十戊午年  
聖堂普請に付圍込。上地に相成。替地の義麴町平河町續貝坂邊  
に於て。元坪の通り八百坪餘受領す。明治四年寺額貳百石を始  
めとして。受領屋敷共悉く上地被。仰付。殆ど無縁無權に屬す  
其後彌廢寺の景況に至れり。然るに東京市本郷區本郷四丁目眞  
光寺住職眞泉光圓。同寺の兼住職になり。種々熟考協議の上。  
隅田村木母寺は。明治元年十二月十日。無縁無住の故を以て願  
濟の上廢寺となれり。往古本末の因縁を以て本寺の名稱を相續  
し。大泉寺を以て木母寺と改稱出願の處。明治廿一年九月廿四  
日許可同年十月中現今梅若念佛堂舊地へ移轉願濟の上再建せ  
り。  
再建の際贊助せし諸家の歌並に詩文は。載せて同寺の所藏せる  
賛成簿に在り。今其の一二を抄出す。

明治二十二年二月

東京府知事男爵高崎五六題

光圓上人再建木母寺。感而賦之贈。

梅若古家始千載。四時佳景在墨水。殿堂門廡歸鳥有。木母寺跡  
今安在。光圓上人叡山派。撫今思古暗垂淚。自捐貲財圖再建。興  
廢繼絕志不怠。我聞土木已起功。頓復舊觀應在邇。朝梵夕唱如  
可聞。冢下幽魂定悅喜。近來緇徒煽頽風。毀寺賣地曾不耻。較  
之上人異雲泥。可無極口讚其美。

明治二十一年十一月

元老院議官文學博士中村正直



頃者光圓上人。將再建木母寺。訪余麴溪草堂索題。仍倒用敬宇中村先生韻。賦此以贈。

樓閣崢嶸半空峙。緇俗共稱丹縷美。如此盛舉非不多。僧綱不振堪可耻。光圓上人韜道德。操行高邁多隨喜。東臺講法三十年。名聲夙聞震遐邇。梅兒家畔草成叢。堂宇荒涼任傾殆。昔日幽魂無所尋。行客過之空拭淚。上人募緣企再建。法燈重輝觀自在。朝梵夕唱靜不喧。清磬聲度墨江水。

己丑一月申澗

瑤溪逸史北澤正誠

木母寺再建贊成簿序

墨堤北盡之所。里俗稱木母寺。古時有木母寺。其廢絕既尙矣。惟一古墳。世所謂梅若冢者是也。梅柳松榛點粧其境。幽邃超俗。韻士之所探勝而顯者。亦所游以避煩也。東都雖多勝區。而木母寺之名最著焉。世傳貞元元年吉田少將惟房之孤兒梅若丸者。爲猶買所欺拐。落魄死於茲。僧忠圓憐之。就築一冢。植柳於其上。越明年其母追跡而來。聞其已死。悲慟亦死。里人哀之爲營小堂。稱曰隅田院梅若寺。僧忠圓住之。此事雖無正史之可以徵者。而足利氏之時已有隅田川梅若丸之謠。其他雜出於古歌紀傳者多。而現有古冢之存者。則其爲五六百年以前之古跡。不可復誣也。慶長十二年藤原關白。拆梅字爲木母。爾來稱木母寺。慶安年間德川將軍嘗詣之。增築一字。且給土地以爲香花之資。其由緒來歷概如此。而業既廢絕至於今。人或以木母寺爲地名。則著名之勝區。亦將併歸於泯滅。豈有不歎惜之者乎。城北本鄉有眞光寺。寺主光圓上人慈愛而博濟。今茲戊子十月。得官準。將就木母寺之故址而再建之。其計營略成。比叡山延曆寺主深賞之。寄贈阿彌陀佛一軀以安置之。夫再建之功果竣。則久絕之梵唱復興。而善男善女之感亦將隨而隆矣。乃佛德之普敷豈淺鮮乎。且勝區之將泯者亦將因以存焉。可謂昭代之美舉也。上人不欲專美

於己。廣募贊成之人。將記其名字於一牒。以與木母寺俱存之於不朽矣。此牒則是也。若使梅若母子有知於地下。則不獨仰上人追舊之厚。亦將有感贊成諸子之賜矣。余喜作之序。

明治二十一年十二月念五日 小寺秀信撰

隅田川にあそびけるをりよめる

山階宮 晃親王  
近衛忠 熙卿

今よりは彌さかゆらん寺の名を殘すしるしの猶朽すして

祝木母寺再建 津田 眞道

阿耨多羅三藐三菩提の姿哉梅の薫りも花の悉まひも

木母寺の再ひ起るを 平山 省齋

法のはな咲てはしほみしほみては

またさきかへる春はとこしへ

梅若神社の佛式に祭られしを祝ひてよめる

鳥地 黙雷

たらちねのめぐりあひつゝ迷ひ見もけふ古さとに歸る心地か

廢寺の興隆を感ずるの餘りに 波母山 考信

おもへきやすてに絶にし木の母てら

立さかゆるをまたも見むとは

梅若塚のほどりなる木母寺を再建すとき

久米 幹文

ふるつかの柳なひきてすみ田川むかしにかへる春風ぞふく

木母寺の再建を祝して 跡見 花蹊

またさらに世にかをらむ梅のはな

木母の字説

君のいさをにたち榮えつゝ

尋ね來て問は答へよ都鳥隅田川原の露ときへぬと

と詠し畢りて。佛名を稱して終に貞元元丙子年三月十五日十二歳にして此處に終る。此時天台宗出羽羽黒の僧忠圓阿闍梨。不圖是に會して。無上菩提の作善をなし。遺語に任せて一堆の家を築き。柳樹を植て印とす。一周の春里人集りて。大に佛名を唱へ。忌を吊ふの日。母我子の行衛なくうせ給ふより。移し心なく。尋詠て自から物くるはしきさまして。獨り東海にあぐがれ。遙々と此隅田川に尋來れば。寂々寥々として。新柳烟ふかく。念佛の聲あはれの聞へける程に。其故を問ふ。渡守が云へり。去年の春今月今日に云々のとありしと。其姓名遺言の様を語れば。母我子なるを知り。柳下に泣臥血涙を灑き。今爰に來るとを哀しむ。里人聞て涕と共に佛名を唱へ。是より小堂を營み。忠圓阿闍梨爰に錫を止め。

梅若塚

由緒 人皇六十二代村上天皇の御宇。吉田少將惟房卿の一子梅若丸は。五歳にして父惟房を亡ひ。七歳の時父の菩提の爲め。比叡山に登り修學す。十二歳の時誠に出藍の譽ある奇童にして。和歌に達し。諸人の嫉を受け。惡者共遂に梅若丸を害せんとする故。山を降り。大津の浦に吟ふ。爰に信夫藤太と云奸商。欺き勞りて。共に山川を越へ東に來る。稚兒道中より病に罹りて。漸く總武の境隅田川に至る。船岸に着くと雖も。歩行すると能はず。藤太無道にして。川邊に棄て去る。隅田關屋の里人見るに忍びず。郷里姓名を問ひ。地下の人にあらすと。まめやかに介抱す。稚兒命終に臨んで一首の和歌を詠す。

尋ね來て問は答へよ都鳥隅田川原の露ときへぬと

と詠し畢りて。佛名を稱して終に貞元元丙子年三月十五日十二歳にして此處に終る。此時天台宗出羽羽黒の僧忠圓阿闍梨。不圖是に會して。無上菩提の作善をなし。遺語に任せて一堆の家を築き。柳樹を植て印とす。一周の春里人集りて。大に佛名を唱へ。忌を吊ふの日。母我子の行衛なくうせ給ふより。移し心なく。尋詠て自から物くるはしきさまして。獨り東海にあぐがれ。遙々と此隅田川に尋來れば。寂々寥々として。新柳烟ふかく。念佛の聲あはれの聞へける程に。其故を問ふ。渡守が云へり。去年の春今月今日に云々のとありしと。其姓名遺言の様を語れば。母我子なるを知り。柳下に泣臥血涙を灑き。今爰に來るとを哀しむ。里人聞て涕と共に佛名を唱へ。是より小堂を營み。忠圓阿闍梨爰に錫を止め。

木母を以て梅とすることは。多く其の證を見ず。若し分字とすればは木毎にて。木母にあらず。古今集等の歌にも木毎と用ゐたり。木母なれば極なり。且つ佩府韻府。五車韻瑞。事物異名類編等にも見當らず。然れども江戸名所圖會に左の説あり。參考の爲めに之を掲ぐ。

江戸名所圖會木母寺の條に云。按に木母は。梅の分字ならん。されど梅は毎に从ひ。母にあらず。母にしたかふものは。本朝の俗字にして。止賀と訓す。西齋詩話に。幸得梅山信。嘗日本茶と作りしは。山城國なる梅尾の茶を賞美せしなり。梅は中華(支那を中華といへるは。名分を知らざる者なり。昔時の學者往々此誤あり。)にはなき文字なれば。梅の誤字にやなどおもひはかりて。かく梅山とはせしなるべし。又岷峨集に云く。東山の僧雪村諱は友梅と云しが。梅尾にまうて。この山の名は。我諱の文字なりと云々。是も頗據とすへきか。爾雅に梅は相なりとまた史記に。江南相梓を出すとあるも。梅の事にして母と母と字形類似たれば。母を誤りて母に作るものならん。然ども木母をもつて梅とする事又據あり。因て左に擧ぐ。

増續韻府といへる書に。夷堅志を引て云々。

北朝山濤字致遠。赴召宋。神宗問曰。卿自山路來。自驛路來。濤曰。自山路來。上曰。木公木母如何。濤曰。木公方傲歲。木母正合春。

注曰。木公松也。木母梅也。稱旨除中書云云。

木母寺縁起の跋に。湖海新聞を引て。梅を木母とする事を擧たり。湖海新聞に出る文。上の夷堅志の意に同じ。又青木氏が著せる草廬雜談にも此事を載たり。

梅若塚の由來

梅若の縁起と稱する者三卷あり。其の傳を詳記せり。世間傳ふ



常行念佛を修行すと云ふ。

### ●梅若丸の諸説

梅若丸の事は。正史になき所なれば。諸説隨て多し。荏土圖説に云。

按るに、梅若の事正史實録になしといへども、ふるく傳稱し來り、今は古跡と成、木母寺傳を考るに、六十四代圓融帝の貞元元といふ、父は吉田少將惟貞、其名吉田家系圖に見えずと云、其母は美濃國野大長か娘花子、俗に班女と云、後妙龜尼と云、然るに橋場總泉寺山號を妙龜山といへるも、此妙龜尼によつて也、同所鏡池、妙龜辨天、妙龜明神等の事も、總泉寺縁起にも出たり、草創は則貞元の比かしらす、中興開基は、千葉守胤弘治三丁己より寛政七まで、凡二百三十九年に及へり、貞元よりは、凡八百年にも及へり、されども諸に見むし外據なく、然らば年月も詳ならず、故にいろ／＼附會の説あり、事蹟合考云、梅若丸堂は、嚴有公御成の節命せられ、御造立也。額は本阿彌一族京鷹か峯太虎庵開基光悅の筆也、木母寺、本は湯殿山行人派庵室也、伊勢物語に、業平詠歌名にしおはゞいさこともはん都鳥の趣により、隅田川の謠を作らたるか、しかし此謠と延享迄四百年にも及故、國中謠傳へたる、此隅田川は後にこしらへしものと云、いつれの比よりか彼謠によせてしるしの柳と云を植、未代に至て古跡とは成し也、されは御作事方町榎梁溝口九兵衛と云もの、後に筑後と云、其子備中と云、かの備中無双の坪曲尺彫物上手工匠の名人にて、此者十三才の時、牛若丸の像を木にて彫めり、其頃寺院御建立のみきり、木母寺の住持溝口と心安ければ、彼牛若の像を乞得て、梅若丸の像になしたり、故に虎皮の尻鞆掛たる太刀を帶たり、公家には例なき事なり、

古にどるにより、何事も諺也といふ事はやりものなり、梅若丸といふ人、何ゆゑに有ましきといふや、吉田少將京師の人のしらすといふとも、たえてなきといはれまし、古きものに見えずとも、口碑も亦信すへき事あり、近衛殿下、一とせ江戸に下り給ひて、隅田川御遊覽の時、木母寺の額を自ら題し給ひ、これか歌をよみ給ひしは、古蹟を考覈し眞偽を辨しなどするのたくひよりも、一層高く優にやましとやいふへし、

新編武藏風土記稿に云。按に公卿補任に吉田少將惟房と云人みゑず。梅若丸の事跡は固陋ならされど。古より著明にて。謠曲角田川にも。梅若丸の故事を取りて。我は都北白河に。吉田の何某と申人の只獨子にて候か。父にはかくれ。母許りにこそ參らせ候ひしを。人商人にかとはかされて。か様に成行候なご作りたれば。縁起に載る處と略合へり。謠曲は鹿苑義溝時代の作多ければ。大抵其頃の作なるべし。又僧萬里か梅花無盡藏集。木戸羅釣翁に與へし詩の自注に。河邊有柳樹。蓋吉田之子梅若丸墓所也。其母北白河人と記し。又同集江上春望詩の自注に。隅田在武藏下總兩國之間。路傍小塚見。柳とみえたり。回國雜記にも。斯て隅田川の邊に至て。皆々歌讀み披講などして。古の塚のすかたあはれさ。今の如くに覺へて。古塚のかけゆく水の角田川き、渡りてもぬる、袖かなどあり。二書共に文明の末の作にして。しかも其頃既に古塚と稱すれば。古跡たること明けし。又寛永元年僧寒松か記せし梅若丸の賛序あり。其文下に載す。此余の雜史梅若丸の事に及ふもの甚多し。或は埼玉郡古隅田川邊新方袋村にての事として。現にその地にも梅若丸を祀れる社あり。されど前にも記すことく。當所の古墳なること歴々たれば。當所を其舊跡とすべし。

又或書に云、梅若といへるは、台徳公御代に梅若太夫と業平とて、二人の力者相撲の勝負あり、時に梅若太夫抛殺さる、業平も強く當られほとなく死す、夫より所の者梅若を爰に葬り、塚を築き、業平は牛島に葬り、業平塚と云へるを、いつの頃よりか、へいをヒロとよみて、業平天神と號しぬ、在五中將は光孝天皇御子にて、播州在原にて卒し玉ひ、關東に廟所有へきいはれなし、梅若丸といふは、京家の兒のよし狂言には作れり、しかし九百年以前吉田少將と云公家なし、或云、賴朝旗下に駿河國住人吉田小次郎惟定と云有、曾我兄弟富士裾野夜討の時、五郎時致に疵を得たり、其子駿州角田川邊にて横死せりと云、

又近江佐々木宮別當吉田少將坊と云有、其子を梅若といふ、伯父松江源吾か爲に追出され、粟津の住六郎左衛門方へ落行道にて、勾引され、關東に下向し旅にて死する云々、右の如く諸説ありて一定せずと雖も、要するに梅若は足利氏より以下の者にはあらざるべし。愚出草及び新編武藏風土記稿の説證すべし、

松平定常思出草續篇卷三に云、

梅若丸の事はよく、世人の知る所なれど、物には一向にみえず、隅田川といふ謠ものより、古くは傳へすと、人のいひける、好事の者、京家によりて吉田の少將といへる方ありしやと、きくに、絶てなしとなり、されども今現にその塚あり、端芝にも梅若の母の身を投せし池鏡か池とてその跡遺り、毎年三月十五日には、その忌日とて、都下こそりて群聚するは、その靈の致す事にこそ、梅若成平みな角力取にして、後に附會して神には祀りたりといへる説ありと、是も臆度に出たる説なり、前にもいふことく、今の世の國學者、あまりに考證を

### 隅田河梅若丸賛序

洛陽北白河有吉田少將者。不知其姓氏。不記其年代。有一子曰梅若丸。此兒幼而喪父。有慈母曰班女。班女哺毓此孤兒。兒已及長而登嶽山學問。俊發明媚無双者。有時與兒輩有倭歌之爭。下山而赴鄉里。于時與州商客。見此兒之獨行而勾引之。赴關東而取長途。生憎賊心偏以欲賣却爲利也。已到隅田河。可憐此兒氣體微弱。調護失宜。屢修程感風寒。憂疾病而行不得而僵臥。商客未如之何棄而去也。其病不痊而終逝矣。實三月十五日也。其齡纔十二歲。卿人憫之葬于隅田河之東畔。誰不敢哀憐乎。其母不知之。尋之下關東。狂癡不覺路土。行人訝之。漸到隅田河。人喚曰狂女。將乘舟。舟人問狂女曰。阿娘是何處人也。答曰我是自都尋人。而下者也。便問舟人曰。前頭群集而擊鐘念佛何也。舟人便爲之。此兒之遺言末後之態度。今日一周忌之經營。以件件事仔細說之而已。狂女曰。我即其兒之母也。自失此子以來。無所措足。尋之而終臻茲。今也聞斯言悲歎一時來矣。日沉沉而天晚。月皓皓而水明。惆悵往塚旁。哭而慟。慟而哭。一心唱佛號。而懇懇回向之。於是塚中有念佛之聲。母聞之知我子之聲而哀號。其兒忽現煙草之間。髮而顯髻而隱。殆爲母子相見之思。而念逆旅。千里佳期一夕休。平明起而暫徘徊。則河水澄兮禽聲嘒々。野風悲兮草色青青。既而母將歸洛之舊里。離墓涉河。不忍而卒。葬之淺茅原。其母子之家如今隔河在東西。後人其兒之家頭立社。梅柳圍繞。遊者詠歌不可稱讀。冢傍有社僧之房。曾月卿遊此詠歌之餘。扁之木母寺。其主人曰尊海。予往載慶長戊申之春偶遊此境訪遺塵。主人出其兒之畫像求贊語。輒一掃而去。後十七年春王正月。予留連江城之幕府。一日本母寺之尊海老持一軸來。從容謂曰。其兒之畫像已古。而容貌不分明。爰有遊客。



一人者洛陽人未重。一人者江州人善政。同其心戮其力。進衆  
緣命丹青之妙手。新令畫少年淡粧之像。其畫已成矣。願書此  
兒之行狀於此圖像之上而齊焉。爲欲傳此事跡於萬代不朽也。予  
感此誠心。不獲默止。粗記古老之言以爲序。其贊曰。  
傳道京城一少兒。隅田河畔捨生涯。幽然美貌今猶在。梅是  
紅顏柳是眉。

寬永元年龍集甲子穀雨後三日。建長龍派禪珠香境野逸叟  
七十六歲書于芝草寒松軒下

右寒松の記は。足立郡芝村長徳寺に傳ふる寒松稿の内より抄出  
す。是當寺に傳ふべきものなれと今は失へり。  
以上の諸説を合せ考へて。梅若の時代等を推想すべし。墨水廿  
四景記に云。梅兒所傳不詳。以其名考之。蓋非凡種也。王室中  
衰。貴紳流離。公子王孫斃於凶賊之手。蕙折蘭摧。誰不哀誦淚  
下。然當時公卿多失采邑。殞命鋒鏑。委身奴虜。其留姓名受吊  
祭果有幾人。獨梅兒一少年。花下埋骨。魂魄尙香。使天下美人  
才子齊色同哭亦何幸也。此の説可なり。梅若は天下に大功あり  
し者にあらず。唯其の狀の悲哀なるを以て名を千載に傳へたり。  
幸といはざるべからず。

● 謠曲隅田川

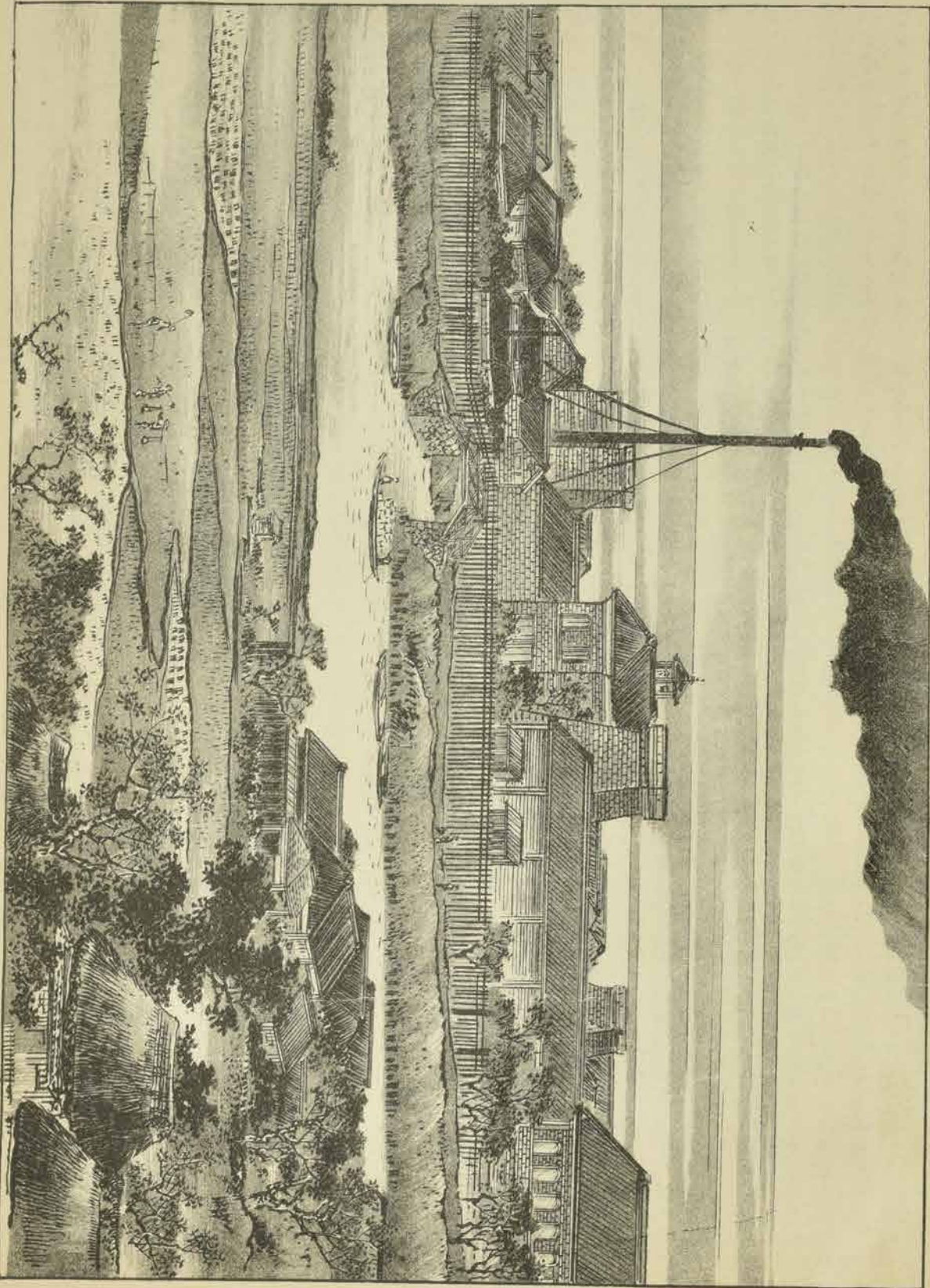
梅若の事蹟を載するもの。謠曲隅田川を以て最もふるしとす。  
因て左に掲ぐ。若し謠曲を好める者ありて。醉後家前に於て謠  
はし。定めて一興なるべし。幸に謠曲家久我好戀君余か爲めに  
之を記送せられたれば。弘く同好に傳ふといふ。

隅田川

ワキ「是は武藏の國隅田川のわたし守にて候。今日は舟を急ぎ人  
を渡さはやと存候。又此在所に去子細候ひて。大念佛を申事  
の候間。僧俗を嫌はず人數をあつめ候。其由皆く心得候へ男末

も東の旅衣。日もはる／＼の心かな。か様に候者は都の者にて  
候。我東にしろ人の候程に。彼者を尋て唯今罷下り候。雲霞あ  
と遠山に越なして。幾關々の道すから國々過て行程に。爰そ名  
におふ隅田川。渡りに早く着にけり。急候程に。是ははやすみ  
たの川の渡にて候。又あれをみれば舟か出候。いそぎ乗らばや  
と存候。如何に船頭殿舟に乗ふつるにて候ワキ中々の事急ひて  
召れ候へ。先々御出候あとの。けしからず物騒に候は何事にて  
候そ。男さんに都より女物狂の下り候か。是非もなく面白う狂  
ひ候を見候よワキ左様に候は。普船をどめて。彼物狂を待  
ふするにて候。先此方へ渡り候へ。女實や人の親の心は聞にあ  
らねども。子を思ふ道に迷ふとは。今こそ思ひ白雪の。みち行  
人にとつて。ゆくへを何と尋ぬらん。きくやいかに。うはの  
空なる風たにも。地松に音するならひあり。女眞葛か原の露の  
世に。地身を恨てや明くれん。女是は都北白河に。年經てすめ  
る女なるか。思はざる外に獨子を。ひと商人にさそはれて。行  
へをきけは相坂の。關の東の程遠き。あつまとかやに下りぬぞ。  
聞より心亂れつ。そなたとはかり思ひ子の。跡を尋てまよふ  
なり。地千里を行も親心を忘れぬと聞物を。本よりも契り假  
なるひとつ世の。其中をたに添もせて。爰やかしこに親と子の  
四鳥の別れはなれや。尋ぬる心の果やらん。むさしの國としも  
つけの中に。隅田川にも着にけり。女な舟人。我をも舟に  
のせて給り候へワキ「おとはいつくよりいつかたへ下る人を  
女是は都より人を尋て東へ下る者にて候ワキ「都の人といひ狂  
人と云。面白う狂ふてみせ候へ。狂はずは此舟にはのせまい  
そとよ女うたてやな隅田川の渡し守ならば。日も暮ぬ舟に乗  
れど社承はるへきにさはなく。かたの如くも都の者を。舟に  
乗るなど承るは。隅田河のわたし守共。おほえぬとをな宜ひ

隅田川側面之圖





ろよワキ「實に都の人とて名にしおひたるやさしさよ 女なふそ  
の言葉はこなたも耳にとまる物を。彼業平も此わたりにて。な  
にしおは。いさこ問ひ都鳥。わが思ふ人は。ありやなしや  
と。なふ舟人。あれに白き鳥の見えたるは。都にては見馴ぬ鳥  
也。あれをは何とか申候そワキ「あれこそ沖の鷗候よ 女よし浦  
にては千鳥ともいへ鷗ともいへ。などこの隅田河にて白き鳥を  
は。都鳥とはこたへ給はぬワキ「實に誤り申たり。名所にはすめ  
ども心なくて。都鳥とはこたへ申さて 女沖の鷗と夕浪のワキ「昔  
にかへる業平も 女「有やなしやととひしもワキ「都の人をおも  
ひつま 女「わらはも東に思ひ子の行へを問は同じ心のワキ「妻を  
忍び 女「子を尋ぬるもワキ「思はあなし 女「戀路なれば 地「我も  
又いさこ問ふ都鳥。わか思ひ子は東路にありやなしやと。と  
へ共く答へぬはうたて都鳥。鄙の鳥とやいひてまし。實や舟  
鏡。ほり江の河のみなきはに。來あつ、暗は都鳥。それは難波  
江はまた。隅田川の東にて。思へはかきりなく。遠くも來ぬ  
る物かな。去どては渡守舟。こそりてさはくども。のせさせ給  
へわたし守さりてはのせてたひたまへワキ「かゝる譚しき狂女  
こそ候はね。急ひて船にのり候へ。此渡りは大事のわたりにて  
候。かまひて靜に召れ候へ。最前の舟に召れ候へ。男なふあ  
の向ひの柳の本に。人の多く集りて候は何事にて候そワキ「さん  
候あれは大念佛にて候。夫に付哀成もの語の候。此舟の向ひへ  
着候はん程にかたつて聞せ申候へし。扱も。去年三月十五日。  
や。しかも今日の事にて候。ひと商人の都より。年の程十二三  
はかりなるをさなき者を買取て。奥へ下り候か。此をさなき者。  
いまたならはぬ旅の勞にや。以外に違例し。今は一足もひかれ  
すどて。此河岸にひれ臥候を。なんほう世には情なき者の候そ。  
此稚き者をは其儘路次に捨置。商人は奥へ下つて候。去間この

邊のひとく。此稚き者の姿を見候に。よしありけにみえ候程  
に。様々にいたはり候へども。前世の事にてもや候ひけん。  
たんだよわりのよわり。既に末期と見えし時。おことはいつく  
如何なる人ぞ。父の名字をも國をも尋て候へは。我は都北白  
河に。吉田の何某と申し人の唯ひとり子にて候か。父にはおく  
れ。母計に添奉り候ひしを。ひと商人にかとはかされて。か様  
に成行候。誠は都の人の足手影までもなつかしう候へは。此道  
の邊りにつきこめて。臉に柳を植て給はれど。をどなしやかに  
念佛四五返稱へ。終にこと終て候。なんほう哀成物語にて候を。  
見申さは船中にも。少く都の人も御座有けに候。逆縁ながら念  
佛を御申候ひて御吊ひ候へ。や。よしなき長物語に舟か着て候  
どうく御あかり候へ。男いか様今日は此所に逗留仕候ひて。  
逆縁ながら念佛と申さうするにて候ワキ「いかに成狂女。何と  
て舟よりはかりぬを急ひて上り候へ。荒譚や。今の物語を聞候  
ひて落涙し候よ。いそいで舟より上り候へ 女「なふ舟人。今の  
物かたりはいつの事をワキ「去年三月しかも今日の事にて候。  
女「扱其兒の年はワキ「十二歳 女「主の名はワキ「梅若丸 女「父の名字  
はワキ「吉田の何某 女「扱其後はおやとて尋すワキ「親類とて  
たつねえず 女「まして母とて尋ぬよなふワキ「いや思ひもよら  
ぬ事 女「なふ親るいとて親とて尋ぬこそは理りなれ。其  
をさなき者こそ。此物狂か尋ぬる子にてはさむらへとよ。なふ  
是は夢かや荒淺ましや候ワキ「言語道斷。今迄はよその事とて  
存て候へ。扱はおことの子にて候ひけるそや荒痛はしや候。よ  
しく御歎き候ひても歸らぬ事。彼人の墓所を見せ申候へし此  
方へわたり候へ。是社なき人の舊跡にて候。よく御どふら  
ひ候へ 女「今迄はさりとあはんを頼みにこそ。知らぬ東に下  
りしに。今は此世になき跡のしるしはかりをみる事よ。扱もむ



さんや死の縁とて。生所をさつて東のはての道の邊りの土と成て。春の草の生茂りたる。此下にこそ有らぬや。地ざりては人々此土を。かへして今一度。此世の姿を母に見せさせ給へや。残りてもかひ有へきは空しくて。あるはかひなきはき木の。見えつかくれつおもかけの。定めなき世のならひ。人間うれひの花さかり無常の嵐音をひ。生死長夜の月の影不定の雲おほへり。實目の前のうき世かなワキ。今は何と御歎き候ひてもかひなき事。たゞ念佛を御申候ひて後世を御吊ひ候へ。すてに月出河風も。はや更過る夜念佛の。時節なればと面々に。しようこそをならしすゝむれば。女母は餘りのかなしさに。念佛をさへ申さすして。唯ひれふして泣居たりワキ。うたてやなよの人多くまします共。はひのどふらひ給はんこそ。安者もよろこび給ふへけれど。鉦鼓を母に參らすれば。女我子の爲とききは實。此身も晝鐘をとりあけてワキ。歎きをどめこゑすむや。女月の夜念佛もろどもに。ワキ心は西へと一筋に。二人南無や西方極樂世界。三十六萬億。同號同名阿彌陀佛女。南無阿彌陀佛。地。南無阿彌陀佛。女。南無阿彌陀佛。女。隅田河原の浪風も聲立添て。地。なむあみた佛南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。女。なにしかは。都鳥も音をそへて。地。なむあみた佛南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。女。なふ唯今の念佛の聲は。まさしく我子の聲にて候。此塚の中にて有けに候ワキ。我等もさ様にきいて候。所詮こなたの念佛をほとめ候へし。母御一人御申候へ。女。今一聲こそきかまほしけれ。なむあみた佛。子。南無阿彌陀佛。なむあみた佛と地。聲のうちより。まほろしに見えければ。女。あれは我子か。子。はにてましますかと。地。たかひに手にてをとりかはせはまた。きえくど成行は。いよく思ひはますか。み。面影もまほろしも見えつかくれつする程にし。のめらるも。ほのくど明

ゆけは跡たえて。我子と見えしは塚の上の。草花とどして。唯しるし計のあさちか原と成こそ哀なりけれ

●梅若の涙雨  
毎年四月中旬頃は。花曇りどて。春雲淡く林を籠め。或は雨空濛として降る。是日雨ふるを梅若の涙雨と稱し來れり。栢木如亭の黄昏一片藤蕪雨。偏傍王孫墓上多。寺門靜軒の夜雨千年涙。曉晴今日風の詩句は。此の涙雨をいへるなり。

●大念佛供養

當寺念佛堂に於て。毎年三月十五日大念佛供養あり。明治の初まで執行せしが。梅若は神社となり。木母寺廢絶せしに因り。一時中絶せり。然るに同寺再建成り。佛式に復舊せしを以て。大念佛供養も亦同じく再興し。今は四月十五日に之を執行するを例とせり。

●寶物

一 木母寺額字 一幅  
近衛三親院殿。梅若丸墳後の柳枝を筆となして書し給ひし由。飯室昌盈と云ふの、事記に載たり。さもありしにや。字樣ごとに雅なり。又明和五年近衛家雜學佐竹石見守齋藤主水鑿定の添狀あり。

一 扇子

梅若丸所持柳葉扇と號す。長八寸許。紺地に花を畫く。骨は象牙にして十八間なり。

畫賛掛物

三 幅  
三福對にて。中は梅若丸の坐像。狩野牧心齋安信筆。左は隅田渡津の圖。常信筆。右は山王社探幽守信筆。三幅共に上に釋江雪宗立か賛あり。

右三幅對の詩賛

北と東のすみた川なり

●梅若丸の坐像

不借丹青面目眞。東湖欲印鏡山月。恰如孟母擇芳隣。出北白河登嶺嶺。

●隅田川渡津の圖

天際雲狂隔故岑。隅河却淺愛河深。飛鳴鷗亦念其子。共濕白衣悲母心。

●山王社の圖

將謂若梅深雪中。一時埋沒武陵東。年々長是認蹤跡。吹發芳聲楊柳風。

●萬治第三庚子季秋下浣日前大德再住東海江雪叟宗立書

一 梅若權現緣起 三卷  
土佐家彩色繪入なり。寺傳に。此緣起は昔大猷院殿の御旨を受て。重治の祖對馬守某撰へる所なりといふ。卷末の文に云。

此寺の緣起破壊に及び。畫圖文詞正しからざる故。安藤對馬守重作再興して。畫工能書に命し。緣起三卷に事生。當寺主典海へ寄進して。永く此寺の什物となす。神は敬によつて威を増の謂歟。

一 近衛三親院殿詠歌

于時延寶七曆乙彌生申句 一幅  
こたへせはわかいて。こしみやこどり  
きてみるに武藏のくにの江戸からは

●境内の碑文

一 都鳥手鑑 額面 二 冊  
一 梅若權現 額面  
彰仁親王御筆 明治廿二年八月御寄附  
一 梅柳山 額面  
能久親王御筆 明治廿七年八月御寄附  
一 梅若堂 額面  
内大臣三條實美公筆 明治廿二年八月御寄附

神風街住 酒井氏  
應需逸樂書

一 一とせの空のしまりやけふの月

花にとてのけてなく日もなかりけり  
天保十己亥年三月此中庵社中建之

略供やいつれ櫻の棒はつれ

櫻哉よし野は見すとすみだ川  
手のとく雲あり花の隅田つゝみ  
年々につゝみかたまる櫻かな

芳川 葛呂 東子 陶齋



浪か花かいさこととはむみやこ鳥

松園

人を忍ぶ人もやあらむ水くきの

宗朝

あどをかたみと残すことの葉  
安永十辛丑春伊丹氏置之八十有四歳

咲花を人ちらすかどかどろきて

玉陶齋

みれは小蝶の遊ぶのどけさ

歌よみて月雪花の樂しみは

冠月庵星員

たるの口から酒も出次第

○ 恆山先生武藝勅石記

武藝十八般備以應於用。非至誠以守之。至柔以濟之。則未可謂之戲亂禱治也。故不善藏之於用。則足以殞身辱名焉。斯言余聞之於恆山先生。先生名恒衡。酒田氏出羽人也。學發古今韜畧之蘊。技開諸家武藝之微。一起手則機會風發。可以陷堅折銳矣。如白打之技。手不執寸鐵。奮拳一搏。人無由敢拒焉。嘗挾其技。浪遊四方。西海北陸。諸道所到。比較其術。未或之先者也。其遊於崎嶇。聞先生之風。贊謁受業者數百人。乃建碑表其技之高。皆規撫師法。而不墜云。先生嘗謂。至柔所以制至堅也。彼以強加於我。我以柔而制之。謂之知其雄守其雌。若夫神而明之。則存乎其人。從先生而遊者。循其指授。各進乎技矣。乃相議使梓撰文紀其教之所由。勒之於石。後世欲觀先生之道者。宜徵之於斯文矣。

天保辛卯秋七月

綾瀬 龜田梓撰

杉山懿書并篆額

○ 題隅田隄櫻花

鵬齋老人興作并書

長隄十里白無痕。訝似澄江共月渾。飛蝶還迷三月雪。香風吹度水晶村。

文政三年庚辰春三月

隅田櫻花豈徒蟻珠三百斛。玉樹千萬枝。長隄作十里錦步障。每春艷一放霞。蕙芳姿浪濯玉英。人醉萬斛之香。蝶迷三月之雪。洵足駐吟客遊春之節矣。先子嘗得一詩。親書以遺之。隅田里正阪田氏石工窪世祥。蒙先子之知者久矣。乃乞而鐫之於石。揮斤老硬。獨存真液。對之猶趨庭闈承義方之日。殊不勝悲慕感愴之情也。

文政己丑春二月

龜田 梓識

寺本永門生

九歳童清水孝書

本碑は同寺に於て從來著稱せらるゝ者なり。もと隄上に在りしが。今は移して梅若家の西畔に立たり。

明治十五年七月。朝鮮之變。堀本中尉等十  
四人見害。當時同遭難而幸免者二十六人。

乃相謀建碑。永寓感愴之念。

明治二十年七月

特命全權公使從三位勳二等花房義實題額  
内務省記録局長從五位勳五等近藤眞鏞撰  
勳七等石幡貞書

守命  
時供



隅田神社之圖





裏に

堀本 禮造 水島 義  
 岡内 恪 廣戸 昌克  
 漢池田平之進 川遠矢庄八郎  
 遭川上 堅輔 害宮 銅太郎  
 七池田 爲善 七近藤 道堅  
 人本田 親友人 鈴木金太郎  
 黒澤 盛信 飯塚 玉吉

花房 義賢 武田 尚  
 近藤 眞輔 樋口 將一  
 水野 勝毅 曾 庸輔  
 佐川 利治 川上 立一  
 松岡 高 横山 貞夫  
 杉村 秀三 高木 利三  
 千原 貞 楓 木 玄哲  
 石橋 顯 五十嵐 惠吉  
 浅山 三郎 中村 卯作  
 久水 永成 今西 美正  
 大庭 兵一 宇野 助右衛門  
 岡 志津三郎 奥山 錫

志賀喜一郎 鐫

明治廿四年六月建

### 天下之系平

伯爵伊藤博文書

裏に

田中平八。本藤島氏。卯兵衛第三子。冒田中氏。以天保五年七月十八日。生信濃國伊奈郡赤穂村。少有奇志。周遊諸國。備嘗難苦。遂來横濱。服賈家。號系屋。致財鉅萬。自稱天下之系平。明治十七年六月八日没。享年五十一。葬神奈川良泉寺。

明治二十四年六月

子爵杉孫七郎撰并書

宮龜年刻

建碑資贈寄諸君

發起者

高島嘉右衛門

澁澤

喜作

榊旋首唱者

矢島 平造

澁澤 榮一 米倉 一平 原 善三郎

榊旋協參者

福地源一郎 岩出惣兵衛 茂木惣兵衛

注 純市

伊集院兼常 横山孫一郎 西村喜三郎

加藤徳次郎

大倉喜八郎 雨宮敬次郎 木村利右衛門

富 貴 樓

### 三遊塚

鐵舟山岡高步書

裏に

爲先師三遊亭圓生翁追福建之

明治廿二年三月二十一日

三遊亭圓朝

同 門人中

### ●浮島及び隅田宿

浮島といふは。隅田川神社の社地なり。其事詳に隅田川叢誌に記せり。曰く隅田川の浮島と云は。隅田川神社の社地なり。此社は。水神船靈の兩神を祀れる故に水神の森とも云。里傳に。此社地は。昔よりいかなる大洪水にても浮て沈む事なし。故に浮島と云とそ。按ふに土地の浮くこと有へからず。依て出水の度毎に現況を見るに。水面聊高低の筋ありて。社地はいつも低き筋に當れり。大堤より見れば。社殿より社務所は低き故に四五尺も水中に沈みたりと見ゆ。舟に乗て來れば。近寄に隨ひ。漸々高くなるやうに見え。社地に至れば。水上にあり。然れば土地の浮くにはあらず。社邊は水低く流るゝ故に浮く如くに見ゆる也。昔は此浮島の南に隅田宿あり。奥州街道の驛舎なりしか。其後千住通りに街道替り。又慶長年中。大堤築造ありて。隅田驛の人家皆堤内に移たり。故に浮島の邊を元隅田と云。社前なる水神道と云は。奥州街道の跡にて。道の西通りに隅田川の渡し有し也。在原中將のいさ問はむ都鳥と歌よみたまひしは



此所なり。故に浮島を言問の岡とも云とそ。又隅田宿にはケコ口と云飯盛遊女などありて昔は盛なるものなりしと云。

### 隅田川神社の現況

隅田川神社はもと水神社。又は浮島神社ともいへり。南葛飾郡隅田川村にありて。木母寺の西二丁餘なり。鳥居は隅田隄畔に在りて。其側に文政二年春三月に建つ所の碑あり。左の如くに刻せり。

建久年間垂跡

隅田村總鎮守水神社是より西二町餘  
山東菴京山建并書

此鳥居より西方に向ひ。田間の細徑を歩すること二町餘にして。鬱茂せる森林あり。之を水神森と稱す。隅田川神社は即ち此處に在り。南に面して建つ。前に石鳥居あり。此邊りに百度參拜標其他一二の碑見ゆ。中に梅堂安徑の「雨雲の下にあかるきやくらかな」と詠したるも面白けれど。左の碑は尤も人の注意を惹くなるべし。

此浮島は在原中將都鳥詠歌の舊跡にて言問の岡と云水神道は昔奥州街道にて道は西通り頼朝橋の舊跡也

言問ひしては花はすみた川なかれても世に匂ひけるよ

眞道

此碑の。橋柱の形に摸したるも亦意なきに非ず。石鳥居より少しく進みて石燈を踏むこと五六級。即ち隅田川神社境内と爲す。本社は其中央に在りて社務所と接す。間口三間。奥行二間の小社なりと雖も。構造堅固。床下に周らすに石垣を以てしたり。文政二年春三月の造營にして。每柱寄進者の姓名を刻す。本社の後ろに至れば。石垣に門を設け。左右の柱に左の如き句を刻せり。

うつ石のひことに花も咲ませは神のめかどにかゝるしら雲

よけてふる花のあす田の河原風かはらぬ色をあすたにもみむ  
さて本社の正面に掲けたる隅田川神社の額は。山岡鐵舟の筆なり。其側に碑の横額あるは。即ち所謂頼朝橋の朽残りたる柱を水底より掘出したるまゝ、削りて此に納めたるなり。長七尺許。幅一尺にして。左の文あり  
隅田川の水底に頼朝橋の古きはしらの朽残りたるをこたひ八百松のあるし掘出したれば額は額にものして當社にをさめ奉るどて  
すみた川なかれに朽す世にのこるよりも橋のはし柱これ  
明治廿八年九月神の舎のあるじしるす  
拜殿内に入れれば。正面に水神社。船靈社と書せる額を掲ぐ。大勳位彰仁公の筆なり。其他拜殿内には。川端玉章筆の舊大名行列の額。同筆隅田川八景の額等を首として。數多の額あり。又井神の額を數多奉納せるは。本社祭神の川水神。井水神なるに因りてなり  
拜殿を出れば。左の方には。大龜の形を模せる巨石あり。是れ本社々掌矢掛弓雄氏の納むる所なり。右の方には。小高く土を積みたる處あり。是れ神武天皇遙拜所にして。府下諸社中稀に見る所なり。是より本社の横に至れば。粟島神社。丑寅神社あり。又後ろに至れば。關屋天神社あり。其他境内の諸名木等は。別項に細記するを以て此に言はず。たゞ本社の寶物に就て。少しく其見所を言はん。寶物は。前に述べたる橋杭の額。及び頼朝橋の鏝。旗上八幡宮の石突なり。鏝の事は。前卷隅田川の條下に出づ。石突の方は。後藤清平の記せる文あれば。左に載せて讀者に紹介せん。

是の石突は。源朝公の旗竿の石突のよしにて。隅田河のほとり隅田村の百姓源右衛門。今苗字を小山といふもの、先代。いつの頃か村内の畑の中より。左に掘り出せる旗上八幡宮と彫付たる石と。同一時に掘出せるものにて。此すりものにそへて。當時の御代官佐々井半十郎久保ぬしのもへ居出たるまゝ。奉行方へ内意同れければ。其手に留たくへきとの仰によりて。今に持傳へられしを。明治廿四年に。すみた川の縁にもあればとて。已にゆつられたり。いと珍らしき物になむ有ける。彼の石の上は。浮島神社の祠官矢掛弓雄主が隅田河邊にあれば。ちなみによりて彼社に奉納るになむ。

白はたを二たひあけてものゝふの

よをいさめてし源ぞこれ

明治二十六年三月

隅田河のほとり白ひけの神の社の御前にすむ

七十三翁 賤の舎 清平

### 隅田川神社の縁起

本社の縁起は。二三種あり。此縁起は。舊別當多聞寺の住職。村人坂田某と與に取調へたるものにして。其説の確なるは此に若しくはなしと云ふ。因て此に掲ぐ。

水神宮縁起

抑隅田川水神宮の鎮座せしまず起源を搜索するに。神代の昔。水神龜に乗りて隅田川に出現し給ふて鎮座せしまず處を水神の岡と稱して。武藏下總に塚し。豊島葛飾の兩郡を中流せる隅田川の東岸に突出したる浮洲の岡なり。是を浮島とも云ふ。往古は。此邊より一圓内海の入江にして。其江口を江戸と云。此地を隅田村と云。又須田ともいへり。星移り物換りて。此邊の入江いつしか葭生の地と變し。神龜天平の頃よりして沼川あり。葛西の地を廻りて隅田村に出る。此川を隅田川と云。將亦秩父山邊より出て。豊島足立の郡間を東流し。隅田村に至る大河あり。荒川と云。此荒川の下流と隅田川と合併し。

浮島を周りて。隅田村に添ひて流るゝ所をば總て隅田川といふ。其下流を宮戸川と云。主人浮島に水神まします故に。假宮を造りて浮島宮と稱へ。隅田川神社とも稱す。亦別宮に井戸水神と稱し奉るあり。則本社の傍にある小祠なり。この浮島水神宮を川邊の里人隅田川總鎮守と尊敬す。其後漸々土地開發し。奥州街道の驛舎となる。貞觀年中。在原中將業平朝臣隅田川遊覽の砌。浮島に來り給ひ。水上に浮へる鳥の名を舟人に問ひ給ひしに。都鳥と答ければ。一首の和歌を詠し給ふ。

名にしおはゝいさことゝはん都鳥わか思ふ人はありやなしやと

是より世俗此浮島を言問の岡ともいへり。天徳の頃に至りては。人家益繁茂し。隅田千軒宿といふ。爰に二菴あり。浮島の南にある一字を隅田寺と號す。應和年間の開基にして。水神宮の別當なり。本尊毘沙門天なる故に。天正年中。隅田寺と改め。隅田山多聞寺と號す。また東の方に小高き岡あり。丸山といふ。此岡に山王塚あり。傍に梅若丸の墓あり。爰にある一庵を梅若寺と云ふ。貞元年間の草創なりといへり。治承四年庚子十一月。源頼朝卿房總を経て此驛に到り。隅田川を渡らんとし給ひしに。暴風雨にて船を出し難き故に。梅若寺に御止宿あつて。浮島水神宮に御神念ありしに。風波忽ち解り。三萬の軍勢つかなく武藏へ超給ふ。よつて水神の靈験を感じ。若干の捧財あり。其後建久年中。社殿を造立し給ふ。斯く浮島の神社より三十間南の方に當りて橋を架し給ふ。土俗之を頼朝橋と稱す。此時川中に大さ車輪の如き龜浮ふ。此上に水神出現し給ふ。別當恭敬禮拜して。二七日の供養をなし。尊影をば寫し奉る。其後三井寺の圓満院の宮關東に下



り給ひ。隅田川御遊覧の節。御自筆にて水神の梵字を書し。當社に納め給ふ。亦長祿の頃。太田持資入道道灌江戶に居城あつて。隅田關屋の庭道遙の刻み。水神の舊社にして應願あらたなるを聞給ひ。梅若寺經營の節。同じく社殿修造あり。其頃隅田川に架し給ふ橋を道灌橋と云ふ。又其後土人の架したるを隅田橋といふ。其外假橋數多ありし故。里俗隅田の八橋といへり。慶長年間。大堤を築かれしより。隅田川邊關屋の人家悉く堤内へ引移れり。今浮島の邊は田畑と成けるか。草創の地ゆへ隅田と唱ふ。又水神道は元奥州街道にて今元街道又は元道とも云。此道の西通り川中頼朝橋の舊跡にして。水底に橋杭の朽残りたるありといへり。古より六月十五日祭禮なり。二千有餘年の今に至り。神威赫乎として和光の惠み著しく。水火の難消除五穀成就祈として利益あらざる事なく。願ふとして満足せずといふ事なし。故に延寶年間より淺草山之宿花川戸の信者講中を結び。水神祭を致し。元祿元年に至ては。水神祭の幟を立てたる船數艘を出して。本社に詣す。亦元祿二己巳年より山谷堀に於ても水神祭をなし。旗幟等を押え。數艘の船を連ね。神樂を奏して參詣す。其後寶曆九年己卯六月。始て神輿を造營す。夫より毎年祭禮之節は。神輿乗船獅子囃子等數艘の船を列して神幸あり。葛西領の神社に神輿あるは。牛御前社と當社のみなり。然れば當社船祭りの賑ひ葛西第一と稱するなり。爰に寛政九年丁巳三月。諸人信を發し力を合て。石宮を再建す。因て往事の概略を擧て爰に誌すと云爾。

●隅田川神社

隅田川神社々掌矢掛弓雄氏より官府へ録上したる由緒書あり。今其中の要を摘みて左に記す。

村社 隅田川神社

一祭神

速秋津比古神

鳥之石楠船神

相殿

水波之賣神

一由緒

速秋津比賣神  
大槻木戸姫神  
御井鳴雷神

鎮祭年月不詳。往古より鎮座。隅田川總領守にて。水神社又浮島神社の號あり。社地を水神岡又浮島と云。貞觀年間。在原業平朝臣浮島の邊なる渡船場に於て都鳥の詠歌有しより。浮島を言問の岡とも云へり。治本年中。源朝朝神隅田川渡船の節。暴風發りし故。浮島神社に祈念し給ひ。其後延久年間。社殿建立し給ふ。元年中。同滿院宮隅田川御遊覧の節。水神の梵字を御筆せられて。當社に納給ふ。又長祿年間。太田持資社頭修造あり。慶長年間。隅田川大堤築造ありて。浮島邊の人家悉く堤内に引移り。只社の草創の地に残り。故に社地の邊を元隅田と云。以上社傳の說。明治五年十一月十四日。東京府廳に於て村社に被定候。

一本社 開口九尺 奥行九尺

一幣殿 開口九尺 奥行九尺

一拜殿 開口三間 奥行三間

一社務所 開口三間 奥行五間

一境内 三百十二坪 官有地

一境内立木 四十四本

内

目通一尺以上五尺未滿 四十本

同五尺以上一丈未滿 四本

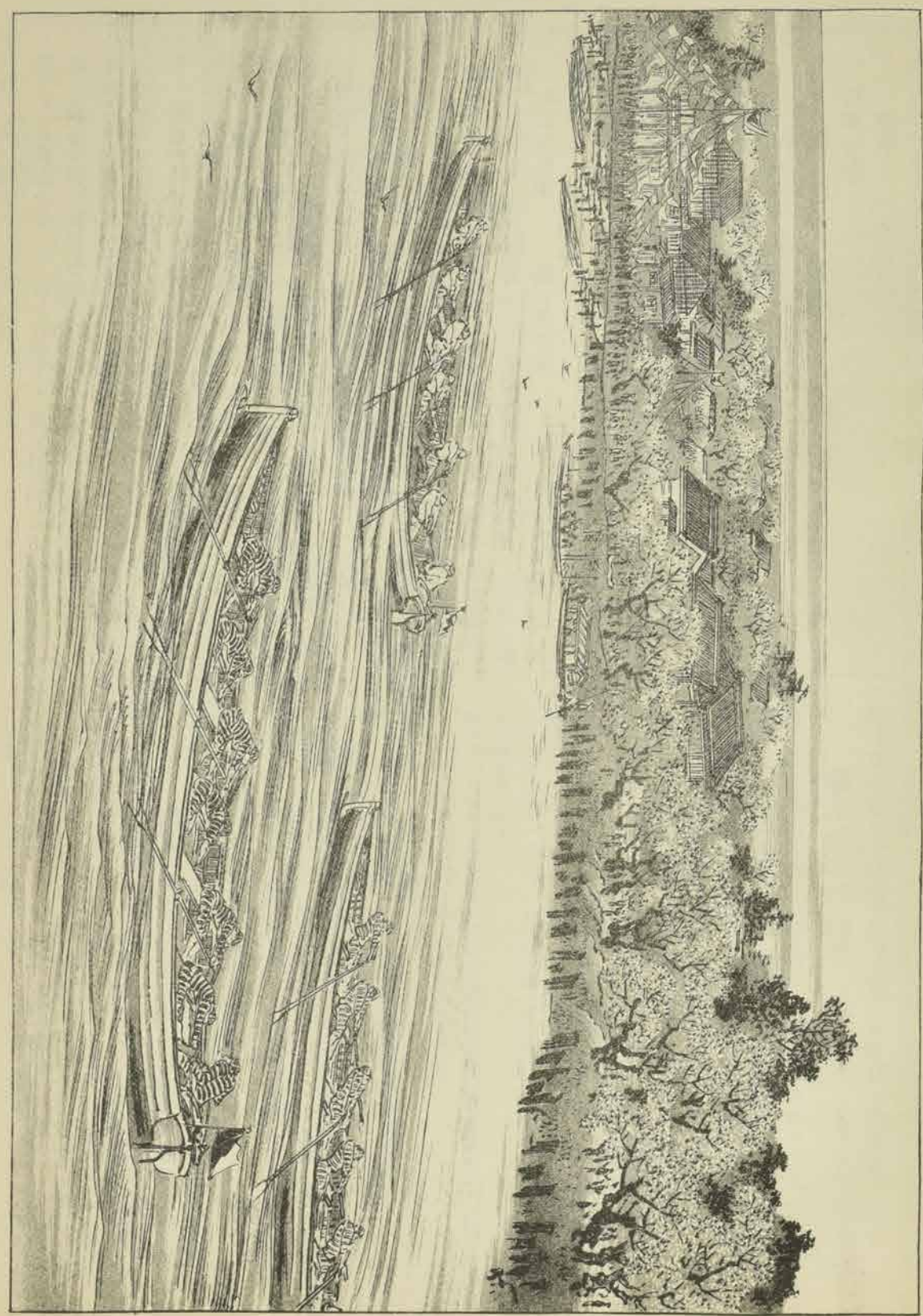
一境内未社 二社

粟島神社

祭神 大己貴神 少彥名神

由緒不詳從前有之

隅田川御遊覧の節





社殿 二尺四方

丑寅神社

祭神 須佐之男尊

由緒不詳従前有之

社殿 一尺四方

一氏子 百九十二戸 隅田村全戸

●合殿の祭神二座

本社の合殿に水波之賣。御井鳴雷の二祭神あり。もと別宮に祀れるものなることは。本社の記事に據りて明なるべし。因て此に擧ぐ。

水波之賣神

御井鳴雷神

右者往古より水神別宮にて。里俗井戸水神と稱し。本社に並ひ有之候。其別宮の傍に。古く大なる皂莢一樹あり。別宮は。二百年程以前及破損。其後は假小社にて。本社の傍に有之候よし。享和二年の洪水以後は。本宮相殿にて。幣帛而已に有之候處。本社外殿造營後。假小祠内陣に鎮祭有之。然る處餘り輕微の粗祠にて損し居候間。更に神庫儀并に小祠共新造調進いたし。是迄の通本社内陣に鎮祭致し置候。此後別宮再建相成候節は。其儘内祠に相用ひ候積りにて極小祠に致し置候。

●本社の石宮

本社の石宮は。寛政九年三月に造立せるものにして。間口一尺八寸。奥行一尺六寸。屋根横幅三尺。下り二尺一寸にして。棟より板床まで高さ四尺あり。本社の記事に左の如く見えたり。本社は往古より木造茅葺なり。建久年中。源頼朝卿造立し給ひ。長祿年間。太田道灌修繕有て。其已後は産子より假宮を造り。又寛政九年に。更に石造りに致し候也。又石宮の裏に銘あり。左の如し。

維時寛政第九。龍寓丁巳。春三月癸亥。造營焉。

●本社の拜殿等

本社の記事隅田川神社古實抄に。左の記事あり。本社の由來を知るの助けとなるもの多ければ。此に抄録す。

拜殿は從來無之。毎歲祭禮の節は。其節度々々年番寄集り。纏結ひて假に取建候由。寶曆九年。神興新造の時より旅所に假屋を取建。神興を飾り候故。三才上兩氏子の年番は。旅所并神興乘船場所等を取設け。中下の二氏子年番は本社を拜殿并儀等を建。道筋の草を削り杯。持分けて是を簞すへき決約の由なり。大鈴は。享和二年二月。下若者中より奉納。世話人は加藤宗次郎。高田惣右衛門。齋藤松五郎なり。是は拜殿上棟の節。行違の事より喧嘩に成。怪我人も有之。其儀免角不相満。立替金の云々有之。漸本年二月に至り。事済和睦相成。右立替金返戻に相成候處。右儀にも成たる故。其金を以て。右中裁三人取計ひ。大鈴を求め奉納致し候よし。

神興は。寶曆九己卯年六月。三才大工相川増太郎に新造爲致候由。此頃近村神興ある社は外に無しと云。享和三癸亥年六月修復す。

御子頭は。寶曆四年に新造す。社前に相建候儀は元祿以前より有之候由。當今の儀は。文政七甲申年六月出来なり。三井親孝書。

本社周廻石の玉垣は。往古木の玉垣なりしを。寛政度石宮造立の節。玉垣も石に造替候よし。其後文政二年に再建致し。亦安政五年年拜殿再建。玉垣も修繕。猶又元治元年甲子本社造營の節。現今の如く修繕致し候由也。

●境内末社關屋天神社

本社の後なる胡桃樹の下に。西方に面せる高さ三尺許の石宮あり。是れ即ち關屋天神社にして。昔しは關屋の庭に在りしを。故ありて此に遷せるものなり。今本社の記事を左に掲げて。此天神社の由來を知らしむ。

隅田川神社境内末社

關屋天神社

祭神 天満天神



右社鎮祭年月不詳。往古より關屋の庭に有之候處。此地は永承の頃より。隅田村名主阪田彌次右衛門新菊當場に有之候處長祿年間。太田道灌江戶在城之頃。隅田川遊園として地内に

水神講

本社（信者）には。水神講といへる組合あり。今本社の記録に據りて其起原を記すへし。一延寶年中。淺草山之宿井川戸の舟持其外信心の請申合。水患報謝火防水難除且家

但其時文政十二年にて猶亦再職調致し候由なり此淺草講を以て水神社第一の大元講とす。

一元祿二己巳年六月廿三日。山谷堀の船宿仲間にて水神祭致し。大傳馬船にて神樂を舞。川風に吹流しの旗を翻し。旗を立てたる家相船日船船數艘をつらねて當社に参詣す。是より初て山谷堀にては毎年六月廿三日に水神祭致し候を定例とす。

一向島水神講の發起は。荷船仲間議定申合のため。仲間にて毎年一度つゝ參會を始め。兩三年も參會を催し候處。兎角不參等有之。無事事故。當村高田文藏。三才の老本茂右工門。寺島村高木茂兵衛等相談の上。參會を改め。水神祭を致し。

境内の三古木

本社（の境内）には。松。榎。樺。樟。木穀等の或は千年を過ぎ。或は五六百年を越へ。或は三百年を経たる古木數多あり。就中茱萸。皂莢。胡桃の三種を以て最も珍木と爲す。今左に其周尺を擧げ。併せて之れに關する所の記録を載す。

茱萸 周尺三尺七寸 但目通り

皂莢 同 五尺九寸

胡桃 同 四尺七寸

一茱萸は。往昔より本社（の境内）の隅にありて。今に猶其所にあり。甚古く大にして老朽かり。樹心は大かたうろに成たれども。毎夏枝葉茂りて實を結ぶなり。實の形大にして葉の如し。即夏やみ也。五月末より六月に至り。實赤く美はしき色になれり。二本立にて。何れも老樹にして。其古大なること稀なるへし。

一胡桃も本社（の境内）の戊亥の方玉垣内にありしを。石宮再建の時。今の地方三間半餘に於て移し植たり。今は大なる老木にて。稍朽て猶若枝茂れり。是も最初の大木朽て。植置たる新木の成木したる也といへり。

右三樹とも往古より社邊にありて。俗に神木と唱へしものなり。

又境内に山神及び眞神あり。本社（の記録）に左の如く見えたり。一拜殿前左右神は。明治二己巳年五月。香取社に有之候を一本移し植。又一本は。小山乃次郎奉納にて植置候處。右は何れも山神と云ふ名。即明治三庚午年五月。舊幕府旗下中島鐵雄より眞神二本奉納なり。是は去る慶應年中。同人義利野の勘定

御役中。山陰御普請御用にて京都在勤中相求。歸府之節録載にて持歸り庭に置候由。且亦右在勤中。仙洞御所御園中に。光格天皇御在世に御裁置の愛者多満の大樹有之。其實を拾ひ持歸り植付候處。生田候を録載に致し。是亦一本奉納致され候故境内に栽植候。無難成木致し候へ共。追て此樹下に神額にても建置度事也。此木がたまに申木は稀なる木にて。神明の至て愛し給ふよし。即古今集の三木三島傳授と申其一木なり。眞神は餘り小木に付。兩三年假植致し置。今少々成木の上にて拜殿左右へ植置候候に有之候也。

短艇競漕

短艇競漕は。隅田川の一奇觀にして。水上の花なりと稱せらる。毎年春秋の二回。高等學校、商業學校、學習院、日本銀行等の生徒諸員之を行ふ。而して高等商業兩學校の漕手最も都人の賞する所たり。其の競漕場は大抵言問亭畔の短艇倉庫前より。下流凡る二千米突の距離とす。開會の前先づ番組を定めて。入場の票券を製し。之を印刷し。來會者に頒布す。觀棚等を架して準備を爲し。陸軍の將校を請ふて其の審判を依託す。其の當日は觀客東西の兩岸に蟻集し。品評紛々。既にして漕手身に新裁の襪衣を穿ち。頭に紅緑等の彩帽を戴き。短艇三四を列して。共に發漕點に在り。勇氣江を呑み。兩腕鳴らむとす。審判官徐かに小蒸氣船に駕し。其の機を候し。號砲を一發すれば。群權一齊に閃き。短艇飛かことし。觀客喝采止まず。紅と呼び縁と叫び。各其の愛する所に隨て激勵す。其の決勝點に近く及びては。艇手狂呼して漕手を鼓舞し。漕手皆全力を奮ひて競進す。忽ちにして號砲耳を裂き。勝者あるを報す。勝者直ちに櫂を立て其の禮を爲し。會長の前に至り。賞品を受けて退く。若し夫れ最後の撰手競漕に至りては。實に今日の盛事にして。其の校名譽の繫る所。選手は是れ競漕に連捷せる者。悉く斯術の達人

あり。來集せる兩校の生徒是に於て乎兩把の汗を握り。齊しく目を注ぎて望觀し。狂號雷の如し。而して勝者優勝旗を獲れば群衆相擁して去り。祝宴を張り。手の舞足の蹈むを知らず。短艇の競漕は。海國男兒の當さに爲すへき所。其の盛會此の如き亦怪しむに足らず。聞く漕手は平素日曜日には。必らずこゝに來りて練習を爲し。一ヶ月前よりは。鶏卵等の滋養品のみを用ひて。他物を服せず。以て氣息を養ふといふ。又聞く兩校の撰手は。斯の技に達するのみならず。其の學術も亦優等を占むるを常とす。是れ兩校の最大名譽とする所なりと。嗚呼學海は渺たり。隅田川の比にあらず。而して外國人の競進する者已に多し。誰か我が舵手となりて方針を定める者ぞ。誰か漕手となりと彼を厭倒する者ぞ。兩校の生徒他校と同じく其任を分擔せざるべからず。幸に其れ旗を勉めよ。

或ひと余に語りて云く。數年前一校の漕手敗を取り。遺憾措く能はず。乃ち數人團結を爲し。相誓ていふ。次回の競漕には。死を以て之に従事し。必らず勝を制せむと。因て川畔の某寺に宿して家に歸らず。毎日黄昏より死装を爲し。經帷子を着し。奮然競漕の演習を爲す。蓋し夜間に入て之を行ふは。敵の知らむことを恐れてなり。寺僧初めは之を止めたれども。其の決心の堅きに感し。遂に經を誦して優勝を祈るに至れりといふ。此の一話以て兩校漕手の熱誠を知るべし。因てこゝに附記す。



日本六十餘諸大家揮毫  
真跡千葉立造君編纂

◎累卵帖 全二冊 正價金壹圓二十錢 郵稅金十錢

附愛石帖 此帖は千葉立造君の爲に現時の諸大家に請ひ累卵の文藝を然として此帖に集るるに千葉君の原帖を納め印本は附與に限り世人に觀覽せしめざるを惜み敬堂其真意版を乞ひ受て附刷す是

宮内省博物館御編成  
◎新撰畫鑑 第二編 全四冊 正價金六圓五十錢

難福圖卷物 箱入 全三冊 正價金五圓

有栖川煇仁親王殿下題字  
◎觀古帖 書帖仕立 卷一正價壹圓八十錢 卷二正價壹圓二十錢

石川鴻齋先生著  
◎夜窓鬼談 上下映入 正價金壹圓三十錢 郵稅十錢

故渡邊華山翁遺墨  
◎一掃百態 全一冊 正價金五十錢 郵稅四錢

美術工藝の一大模範  
◎白龍畫譜 全三冊 正價金壹圓五十錢 郵稅十錢

◎新鈔西清古鑑 全二冊 正價金壹圓 郵稅金四錢

◎華山忠孝血淚譚 全二冊 正價金五十五錢 郵稅四錢

◎軍器館本十七帖 全一冊 正價金四拾五錢 郵稅金貳錢  
王右軍の館本十七帖は三編堂の舊蔵に係る餘幅紙繪墨筆揮毫も遺憾なく加るに藤谷修先生の親切なる釋文をも添へたれば墨池中の至寶と謂ふべし

五二會監督前田正名君題字  
美術學校長今泉雄作君題字  
◎百工應用美術海 每月一回發行 第二十三卷既刊

◎雛形四季の粧 全五冊 正價一冊金三拾五錢 郵稅二錢  
全部金壹圓五拾錢

長谷川契華君著  
◎京華圖案 全一冊 定價金七拾五錢 郵稅金四錢

本書は極めて嶄新を旨とし苟も舊套を襲はず高尚優美艶麗華巧趣味豊かなる美術を基礎として頗る當世に適すべき紋様色目種々を考案し其數六十餘種に及べり凡そ斯道に志ある者は座右に繙くべき良書なり

大田才次郎序入 江英著  
◎臺灣案内 全一冊 正價拾貳錢 郵稅貳錢

臺灣の地理歴史を記するもの日に多く月に増すと雖も概ね其の傳聞する所を記するに止まり實見實視する者は十中二三を求めんと欲するも蓋し得がたからんとす入江英君は福岡の人なり明治二十八年陸軍兵站監部附花房少佐の指揮に従ひ臺灣島内を悉く實地測量したる後始めて命を終へて内地に歸り來り其の測量せる所の地圖及び風俗談は速に弊堂の乞ひに任せて出版の榮を與へられたり此頃諸方の購客諸君より臺灣起業者の案内を編選せしめん事を依頼する者多し氏乃ち詳かに條を分ち項を設けて編述する所あり地理及び起業の要點を擧げ且つ卷末に生蕃言語集を附載したれば今後臺灣に到らん者は全島内到處他人の嚮導を須たすして自在に歩し自在に彼等と語るとを得られんとす

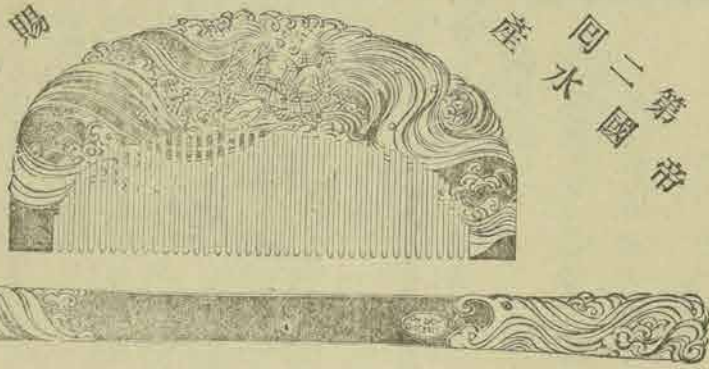
發行所 神田區通新 東陽堂支店 石町三番地

貴婦人持時計



東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地  
時計及貴玉類商(電話本局三百三十三)天賞堂  
東京市神田區小川町十九番地

妙技一  
天賞堂 出張所  
大坂市西區心齋橋北區北三入ル(電話番號七百三十三)  
天賞堂 出張所  
名古屋市中區通玉屋町二丁目  
天賞堂 出張所  
廣島市大手町三丁目六十五番地  
天賞堂 出張所  
本吉唐人町通上野治屋町  
天賞堂 出張所  
福岡市橋口町榮屋方  
天賞堂 出張所  
長崎市東區町上野屋方  
天賞堂 出張所  
北海道小樽色内町中屋方  
天賞堂 出張所  
等賞牌



一國水産  
龍甲 御簪類 各種  
珊瑚 玉並に 各種  
蒔繪 御簪類 各種  
寶石 細工類 各種  
金銀 御簪類 各種  
儀式用 各種  
帶留類 各種

儀式用 五拾圓以上貳百圓  
本甲櫛 六圓以上廿五圓  
四方張製 拾圓以上貳百圓  
九層用 拾圓以上貳百圓  
本甲櫛 拾圓以上貳百圓  
珊瑚根掛玉 參圓以上百圓  
蒔繪櫛 壹圓以上拾圓  
帶留 貳圓以上五拾圓  
金銀彫刻物並に寶石入類は數多きを爲め直段一定難致(凡貳圓以上參百圓)  
御注文の節は御年節並に定價格好等御報を乞

京橋區南傳馬町 貴金屬美術 三丁目京橋北詰 小問物商 奧田屋商店



賞美水白粉と煉白粉



白と肉色 毒ぬき なまりの 御まゆ毛はへざあなほし



定價 (金參錢 金五錢 金拾錢) 原田松白堂

懷中要藥 清心丹



定價 金壹圓 金五拾錢 金貳拾錢 金拾錢

第一心思鬱愛 胸腹の痛を去り 痰咳 留飲 舟車魚肉酒の醉... 近頃いろくまがらわしきもの夥多之あり候

高木與兵衛製 東京市日本橋區元大坂町八番地

本劑は各府縣藥舖及賣藥店にて販賣致候間御購求を乞ふ

奠都三十年祝賀會々員募集廣告

前項の規程要領に基き廣く會員を募集するに付同感の有志諸君 奮て御賛成あらんとを企望す

規程要領

- 會費 (金貳圓以上を寄附する者) 特別會員 (金拾圓以上を寄附する者) 寄附金第一回報告 (金額)...

寄附金第二回報告

肥料問屋頭取 小澤與右衛門 帝國通信社

- 金三百圓 第一銀行役員中金一圓 岡村吉郎 金二百圓 岡村吉郎 金二百圓 岡村吉郎...

明治三十一年四月

京橋區日吉町十五番地九州俱樂部内

奠都三十年祝賀會事務所



大日本壇詰最上無類名酒

雪月花

近日ノ内ニ月世界ト稱スル新釀ノ美酒ヲ發賣仕候  
雪月花ト共ニ御賞用ヲ乞フ

雪月花ハ獨得ノ妙味ト最モ滋養分ニ富メル我國未曾有ノ美酒ナリ  
雪月花ノ標箋ハ松本楓湖永坂石埭兩氏ノ揮毫ニ係ル者ニ體裁新奇美麗ヲ盡セリ  
雪月花ノ外酒醬油味淋洋酒小賣ノ義モ益々良品ヲ精選シ御需メニ應ズベク候間多少  
雪月花取次販賣御望ミノ方ハ御報知次第御相談可申候

發賣元

所捌賣

遠地ヨリ御注文ハ前金着ノ上御送り可申候  
但シ一ダース以上

酒醬油味淋洋酒商  
西宮本店  
(電話本局百七十番)

東京市神田今川橋  
同日本橋區本石町三丁目  
同日本橋區本材木町一丁目  
同神田區鍛冶町  
同神田區連雀町  
陸奥八戸廿三日町

大場壹本 金貳拾五錢  
半ダース 金壹圓四拾七錢  
壹ダース 金貳圓八拾八錢  
壹ダース一箱入 金三圓拾錢  
府内ハはがき又ハ電話ニテ御注文  
次第御届可申候

日本名畫鑑

田中有美先生縮寫  
我邦歴代畫家の名蹟を蒐め日本名畫鑑と題し此を四部に分ち藤原時代の部には、春日基光、同隆能、鳥羽僧正、春日光長、藤原隆信等、鎌倉時代には、藤原信實、住吉慶恩、土佐經隆、姉小路長隆、高階隆兼、飛彈守惟久等、足利時代には、土佐光信、僧雪舟、狩野元信、同永徳等、徳川時代には、狩野探幽、土佐光超、尾形光琳、岩佐又兵衛、圓山應舉、松村吳春等の名畫を網羅し順次出版せんとす  
徳川時代之部

圓山應舉 上中下全三冊 一冊正價金四十錢 郵税金四錢

松村吳春 上下全二冊 一冊正價金四十五錢 郵税金四錢

古人の名蹟漸々埋滅に歸するを嘆し東洋美術振起の爲め多年先生が苦心の末此に上梓せしものなれば原圖と比較毫も筆意を崩さず加ふるに印刷の美、製本の高尚なる美術家は勿論紳士淑媛も繪畫の模範且參考として座右に備へ給はらんことを

發行所 東陽堂支店

東陽堂新刊書目廣告

東京美術學校長岡倉覺三校閱  
東京府尋常師範學校教員大橋雅彦編書  
文部省檢定済

◎小本朝習畫帖 尋常科 全八冊 正價一より四迄金五錢五厘 五より八迄金六錢

◎本朝習畫帖 高等科 全八冊 正價一より四迄金七錢 五より八迄金七錢五厘

◎草書千字文 全一冊 正價三十錢 郵税金二錢

◎褚遂良孟法師碑 全一冊 正價四十錢 郵税金二錢

◎顏真卿放生池帖 全二冊 正價七十五錢 郵税金六錢

◎歐陽洵姚泰公墓誌銘 全一冊 正價金三十錢 郵税金二錢

歐陽洵の墓誌銘を所記の墓誌銘は釋して歐陽洵の古の稱謂を爲す難しきを悉く考へて其の原形を復すに努め、又其の下部に歐陽氏を清人より得たる碑文を刻して其の筆意を久しく所なきを得たり歐陽の書を學ばむ者此書を以て第一の標榜と爲して可なり



魏張猛龍碑 全一冊 正價金七十錢 郵稅金四錢

張府君神額の遺は北魏正元年間の碑にして其文其書は何人の手に成ることを知る者然れども動使古自ら撰を脱去し神來筆意蓋し魯公の下にあらざる道に志ある者は必ず購求する珍書なり

日本風俗史 全三冊 正價上卷金八十五錢 郵稅一冊金十二錢 中下卷金一冊八十錢

文學士藤岡作太郎 平出隆二郎合著 上卷自太古 中卷自鎌倉時代 下卷江戸時代迄 至深平時代 至豐臣時代

類聚婚禮式 全一冊 正價金九十錢 郵稅金十錢

有住齋翁著 山下重民補正

岡田松生著 山本松谷書 日本兒供遊 全一冊 正價金六十錢 郵稅金四錢

原名 Japanees children 本書は隨して兒供遊びと云ふ名稱は即ち實物と相符し巻を開けば數多の兒女子が餘念なく遊べる様を寫し觀るを以て實境に接するの思ふに及ばず未だには岡田氏の英文圖解あれば外國人は之によりて兒遊遊戯の様を一讀の下に會得するの良書なり

井上控齋譯述 矢野龍溪補修 仙鄉奇談 全一冊 正價金六十錢 郵稅金四錢

物語十二編 洋裝美本金七十五錢 郵稅金六錢

諸君御待兼の月耕漫畫七の卷、印刷製本出來したれば茲に發賣す。為よりの部に於て、以呂波引も一と先づこれにて完結したり。月耕畫伯が漫畫に指を染むるや、如何に意匠に苦心するかは、經營慘憺斧鑿の痕歴々見るべし。運筆自在の妙、月耕子の得意として更に一地歩を占むるの世評、誰れか過褒と謂はむ、嗚呼世上繪畫の志ある士、朝夕座右に繙かば、得る所尠なしとせす。

月耕漫畫は全編七卷を發兌して、好評世上に喧ひすし。月耕子の意匠は、未だ全七冊を以て決して足れりとせず、滔々乎として泉の遠く盡きず。弊堂更に同畫伯に乞ひ、再び折り返へして、いの部よりはじめ、其揮毫を依頼したれば、近日月耕漫畫續編を梓に上すべし

王香堂畫譚 別仕立實價七拾五錢 映入郵稅拾錢 並製定價六拾錢 郵稅六錢

凡う畫を繪せんといはれば多く人の沙頭に接せざるべからず南蠻諸國六法の要を繪じてより世の畫を説く者汗牛充棟も富ならず而して未だ其神髓に及ぶ者稀なり本書は有名なる小原重哉先生が善す所と先生は素より畫を能く古人の妙蹟に接して其流派を説き其格を論ずる誰れか今日先生の右に出る者あるべき先生畫きに繪畫共進會の譽あるや 審判部長を以て力を矯正に盡してより名聲噴々たり頃日美術學校長岡倉覺三氏先生を講堂に延き懇話に其書積する所の意見を講述せんことを望めり先生感得する所なく之を陳ぶ其論する所は争ふて都下の新聞紙上に掲載せられて名聲益々高し先生又茲に畫譚を著す其積年遍む所の卓裁愈出でて愈奇古人未だ繪せざる所啓發して遺憾なし實に古今未曾有の珍書と謂ふべし

生川春明翁著述 大槻修二校訂 近世女風俗考 全一冊 正價金五十八錢 郵稅金六錢

此書は髮の結振柄并髪髻の事より體裁衣冠子振袖帯日傘履等に至るまで、婦人の風俗に關する一切の事實を精確なる考證に據りて、大槻先生校訂して印刷製本等に充分注意したる者なれば文學美術家の座右に欠くべからざる珍書なり

實測者入江英編製 大日本臺灣地圖 全一冊 正價金二十五錢 郵稅金二錢

此地圖は陸軍省管轄部附を以て渡臺したる測量技師入江英氏が編製する所、其正確の實なる從來の地圖に比して大に面目を異にしたり全島六十萬分の一に縮圖の縮小に今日地圖の地圖を出版するの書林多し然りと雖も恐らくは此圖に及ぶものはあらじ行政、軍事、殖産開業上大に必要を感ずるの險國新版圖として朝夕座右に展開すべきなり

歐洲山水奇勝 全一冊 本版着色畫帖仕立基本 金七拾五錢 郵稅金八錢

此の畫帖は林學士高島三君の著す所なり君は明治十七年歐洲に遊び二十一年三月歸朝し二十二年再び渡航し同年十一月を以て歸朝せられたり其の間山河を遊歴し遍觀其の奇麗を採りて之を描寫せし者一百餘幅に及べり愛に先づ佛、伊、英の三國に就き其の尤も奇麗なる者を選びて特に雪嶺、氷谷、噴煙、飛瀑の如き造物の奇工を極め天地の精秀を飽かし者のみを掲載せり之を文藝の名山圖譜に比するも決して遜色なきを信す

發行所 東陽堂支店 電話本局九七〇番

速記法 獨習生募集 月謝二十錢 二月卒業 規則 東京下谷區徒士町一丁目二十番地 速記學專修所

外交通商史談 定價九拾五錢 郵稅拾錢

此書古來外交及通商ニ關スル事歴々敘述シ遂ニ今世外交ノ失錯ト内政ノ頹敗ニ及ビ直言痛論モ揮ラズ讀者ナシテ感奮又憤慨ニ堪ヘザラシム殊ニ古來金銀ノ外出總額ヲ研究シ金貨本位制ノ斷ジテ實行シ能ハザルヲ豫言シタルガ如キ至ク尋常ノ所見ニ異ナリ苟モ政事經濟ヲ言フ者ハ勿論實業者モ亦必ズ一讀セザルベカラザルノ要書也

政治經濟及歴史必要上書 渡邊修二郎著

訂補世界に於ける日本人 精刻珍稀圖書并筆跡十九種挿入、全壹冊(中本四百二十餘頁)布表紙定價金壹圓廿五錢(郵送費拾四錢)

羽根根本通明先生校閱 諸名家詩評 鴻齋石川 英先生校閱 冬嶺小松直之進增評 朝鮮歴史 一大奇書 壞誌 全二冊

發行所 神田區通新石町 東陽堂支店 (電話本局九七〇)